

---

# いしの力

夏のサンタクロース

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いしの力

### 【Zコード】

N2128H

### 【作者名】

夏のサンタクロース

### 【あらすじ】

神々が作った石。それはどんな願いも叶う石だという。主人公、今河翔は病気の妹を助けるため、伝説の秘靈石を求め、旅立つ。そして、ついに伝説の石を見つけ、旅は終わりになるかのようにみえた。この作品はフィクションです。実際の名、地名、団体等とは関係がありません。

## 旅の終わり、そして始まり

「見つけた。これが、あの、秘靈石」  
僕はいつにもなく興奮していた。心臓がばくばくなっているのが自分でもわかる。

「おーい、翔、あつたか？」

「うん」  
僕は今河翔。

いたつて普通の小学六年生だ。隣にいるのはクラスメイトの会田光秀、そして、

「ちよつと待つてよ~」

この人もクラスメイトで級長を務める小沢美智子。

この三人で、僕らは伝説の石を求めてここまで来た。この洞窟に。何故僕らがこんなことをしているかといふと……あれは一週間前になる。

いきなりお父さんが深刻そうな顔をして、口を開いた。

「翔、静が、静が、不治の病になつた」

「病氣？治らないの？妹、死んじゃうの？」

お父さんは何も言わない。

「ねえっ、ねえっ」

何度も肩をゆするが、お父さんはそれ以上何も言わなかつた。

その晩、泣きじゃくる僕をじいちゃんが慰めに來た。そして、最後にこう言つた。

「翔や、泣くな。まだ希望はある」

「えつ？」

「この世にはな、なんでも願いの叶う伝説の石がある。その名を秘靈石といつ」

「秘靈……石？」

聞いたこともない名前だ。

「そうじや、秘靈石。しかしそれは伝説上のもの。あるかわからん。龍や妖怪の類と同じじや。それにあつたとしても、もう誰かが見つけているかもしれん」

「それでも、少しでも妹を助けられる可能性があるなら、僕行くッ」「よく言った、さすがワシの孫じや。その言葉を待つとつたよ。ほれ、地図はこゝにある。つちの古い倉庫にあつたものじや」「古ぼけていて、だいぶぼこりがかぶつていたが、

その地図にはぼんやりと伝説の石のありかと書かれていた。

「わい、明日から夏休みじや。気をつけろよ。静の命がかかっているとはいえ、無理をしてはいかんぞ。親には学校の勉強会の長期合宿に参加したとでもいつておいつかの。……本当はワシが行けたら一番いいんじやがなあ」

「いいよ、おじこちやん。おじこちやんは足腰悪いんだから無理しないで」

「ありがとよ。」

「よーし、絶対秘靈石を見つけるぞ」

その晩、決意を固め、一人で燃えていた。

そして、次の日、

「まずどうしようかなあ。……そうだ。友達の光秀を誘おう」ということだ光秀の家へ。チャイムを鳴らすと光秀のお母さんが出てきた。

「あら、翔ちゃん、こんにちは」

僕はあいさつをすると、光秀がいないか聞いてみた。

「光秀ねえ、夏休みの宿題をしに行くとかって言つてね、学校に行つたのよ

「わかりました、ありがとうございました」

学校に向かいながら、僕は考えていた。

夏休みの宿題があ、やつぱり、誘うと宿題終わらなくなるよな。迷

惑だろうか？しかし、こっちは人の命がかかっているんだ。頼みこむしかない。

野を越え山を越えると（うそ）、……本当は住宅街をジグザグに進み、道路沿いを真っ直ぐ進むと、着いた。僕の小学校だ。ん？グラウンドの中央でサッカーボールを蹴っているのは？……。

「光秀！」

光秀はサッカーに夢中でこちらに気づいていない。もう一度、大きな声で呼んだ。

「光秀！」

すると、キヨトンとした顔つきで、いつからそこへいたんだといいたげな様子でこちらを見ていた。

「いつからそこにいたんだ？」

案の定。光秀が振り向くとトゲトゲ頭が汗で光って見えた。

「今きたばつかだよ」

「どうしたんだ？俺に何か用か？」

「ああ、実は……」

光秀に幻の石、秘靈石と一緒に探して欲しいと頼んだ。

## 旅の終わり、そして始まり（後書き）

また、連載を始めたいと思います。時間が空いたり、文章が稚拙だつたりするでしょうが、何とか、お付き合いお願いします。

## 旅の終わり、そして始まり（2）

「やだよ、そんなのめんどくせー。第一あるかどうかもわからないんだろ？夏休みの宿題も終わらないし」

光秀はボールを片付けに入っていた。僕も食い下がるようについて行つた。

「頼む」

「いやだ」

「実は……」

「何だ、何があるのか、嘘で『こまかそうつたつてそういうはないぞ』『実は妹が不治の病にかかつたんだ。僕は妹を助けたい。それには秘靈石が必要なんだ。だから……』」

この時、僕はどんな顔をしていただろう。

「そんな顔すんなつて、わかつた、この会田光秀、全力を持つて協力させてもらひ」

「ありがとう」

「なーに、いいつてことよ。それに、伝説の石を求めて、なんて、面白い自由研究に使えるじゃないか」

僕は笑つてしまつた。光秀らしい。

「あ、笑つたな、パクるなよ」

「まねないよ」

「ちょっと、その二人」

僕と光秀の話に割り込んできたのは級長、もとい小沢美智子だった。僕が先に反応した。

「級長、どうしたの？」

「今のは、聞いていたわ。人の命がかかるとあつちやあ、ほつとけないわ、私も仲間に入れて」

「えへ、どうする、翔」

「僕はいいよ。人数は一人より三人のほうが心強いし」

「……、あそ、お前つてなんつーかな、お気楽思考な。危ない目に会つかもしんねーんだぞ。仮にも女の子を危険な目にあわせられるか」

「確かに」

美智子は光秀の手をつねった。

「いつて！」

「仮について何よ。私はちゃんとした女の子よ。それに危ない目にあうかもしないということは十分承知しているわ。だから私も仲間に……」

「いいよ」

「お前なあ……ま、いつか」

こうして三人で行くことに決まった。

そしてそれからが大変だった。何しろ、子供三人で冒険するわけでお金は僕のじいちゃんに渡されたものがあつたが、宿をとる時や船を借りたりその操縦士を雇う時に信じてもらえないことが多かつた。そんな中、一人の操縦士に出会った。

「ああ？ 船を借りたい？ 付き添いの大人は？」

僕が応えた。

「いません」

「はつ、馬鹿正直な奴だな。だが大人がいねえのなら、船は貸せねえ。お父ちゃんを連れてこい」

「お願ひします。私達には船が必要なの」

級長も頼んでくれたが、貸せないの一点張りだった。次に光秀が、だが。

「頼むよおっちゃん。ほら、金ならこんなに持つてるしさ」と、光秀が言つと、その人はギロリと僕達を一瞥し、「ボンボンの道楽かよおー、やつぱり船は貸せねえな」と、もうダメか、と思つたが、理由を説明してみた。すると、意外にも骨を折ってくれた。

「なるほど、そんな理由が。妹のためにあるかもわからない石を探

しにねえ。いい話じやねえか、よし、金はいらねえ、貸したる。俺  
は三浦、今度から船借りる時は俺に言え」

「ありがとうござります」

みんなで三浦さんにお礼を言ひつい、  
僕らの旅が始まった。

そして糸余曲折を経て、無人島に着いた。洞窟の中は暗く、回りの  
岩は地面も含めてゴシゴシしていた。  
そして最深部に着き、今に至る。

「これ、石というより、砂のようね」  
級長が少し遅れて追いついた。

「そうだな。本当にこれがあの秘靈石なのかよ、翔

「うへん、どうだろ？でも見て、この砂、懐中電灯に当てるときラ  
キラ光るよ。たぶんこれに間違いないよ。……それに他にはゴシゴ  
ツした岩しかないし」

## 旅の終わり、そして始まり～希望

「じゃあ、これを持って早く帰ろ!」  
僕は秘靈石と思われる砂を布の袋に入れた。

「えへ、せっかくの無人島なんだし、私はもつとゆっくりしていいたいけどなー」

「蛇とか巨大ゴキブリとかうようよ出るかもよ?  
「キヤー、早く帰りましょ」

「アハハハハ

僕は笑いながらも内心嬉しくて、たまらなかつた。  
こうして笑いあえる仲間がいることもさうだが、それ以上に妹の命  
を救えるということに。

そうして家に向かつて出発した。三浦さんも一緒に喜んでくれ、僕  
達の旅は終わりになるかのようにみえた。しかし、この時僕達はま  
だ気づいていなかつた。このことが終わりではなく、始まりに過ぎ  
ないということに。

家に着いて一週間がたつた。その頃から僕はある異変に気がついた。  
……おかしい。僕はじいちゃんのもとへ行つた。

「じいちゃん、秘靈石を手に入れたのに、妹の体の調子が良くな  
ないよ」

じいちゃんは焦りと不安でいつぱいの声でこいつ言った。

「お、おかしい。それが本当の秘靈石ならば静は良くなるはず。こ  
れは……一体?」

「僕、僕、どうすればいいの?」

「落ち着け、まだ希望はある。紺城さんの家へ行け、昔、伝説の石  
について語り合つたことがある。手掛けになるはずじゃ」

「じいちゃんの希望は当てにならないよ」

僕は悲しみを押し込めることが出来ず、その場を逃げ出した。

そして翌朝、しばらくボーッとして何も考えることが出来なかつた。

少ししてから夏休みの宿題を終わすため、光秀を誘つて学校に行くことに決めた。

そして、光秀の家。

「すみませーん、光秀君いますか?」

ダダダダダダ、二階から急いで階段を降りてくる音が聞こえた。

「お~、翔じやないか、どうしたんだ?」

「宿題終わつてないだろ?一緒に学校行かない?」

「おう、いいね。俺もそうしようと思つてたとこ。じゃあ、準備するから待つてる」

そして、光秀がきて、学校へ向けて出発した。

「なあなあ、それでお前さあ、静ちゃん、良くなつたの?」

「うつん、全然」

「……、そうか、でもそのうきうきと良くなると思ひせ」

「…………、うん」

光秀は心配そうに僕のまづを見つめていた。バンッ。後ろから誰かが、僕と光秀の肩を叩いた。

「おー一人さん」

いつもどつりの三つ編み姿で登場したのは、

「あつ、美智子じやん。お前だけ妙に明るい奴」

「一人とも妙に元氣ないよお~。どうしたの? 特に翔

「級長。別に……。何にもない」

「そう? とこりで知つてる? こんな噂。最近私達の山麓小で喧嘩を売りまくつてている男子がいるのよねえ」

僕は思わず「リラのような怪力男を想像した。

「あ、翔笑つた、良かつた、元気取り戻せたみたいで。……あ、で、その子、紺城 怜君というらしいんだけど、あんた達も気をつけなさいよ」

「ああ。ん? どうした翔?」

紺城、怜? どこかで聞いたような……。

まだ希望はある。紺城さんの家へ行け

「あっ、もしかしてじーちゃんが言っていた……」

「心当たりがあるのか、翔」

「うん」

## 怜君（前書き）

伝説の石を手にいれたが、妹の病気はよくなる気配を見せない。じいちゃんに伝説の石について何か知っている人物、紺城さん家に行けと言われるも、そもそも伝説の石なんかないのではないかと思いついた僕はじいちゃんに、当てにならない、と言い放ち、その場を逃げ出した。

そんな中、同級生の、紺城怜といつ名を耳にする。

### 主な登場人物

翔……小六で主人公である僕 光秀……僕の親友 美智子……学校の級長を務めている

怜君

「とりあえず、怜君に会つてみたい」

「え~」

びっくりしたような大きな声で一人とも同時に言った。

「何でだよ、俺は会いに行かねえぞ」

「伝説の石に関係があるかもしれないんだ」

「そうか……」

光秀は少しの間、考えていたが、やがて、

「ならしじょうがないな」

「良かつた」

「美智子も行くよな!」

級長は間髪いれずに即答した。

「私は遠慮しとくわ。あんた達、怜君の怖さを知らなわけある。…  
…ホント、ひどい噂なんだから」

僕が級長の方を見ると、いつもの級長では考えられないくらい青ざめた顔をしていた。

「何だ、美智子、前は危険を承知でついてくつったのに」

「今回のとそれは別よ。……、とにかく私は行かない。あんた達の幸運を祈ってるわ。じゃあね」

そう言って級長は早足で行つてしまつた。

「なんでも、あいつ

「まあ、無理強には良くないし……」

……そして学校。

「よし、じゃあ怜君を探しに行こう」

「チツチツチツ」

光秀がお前は甘いなどいわんばかりの顔で指を振つた。

「何だよ~」

「これだから翔、お前は。いいか、このまま直接会つのは美智子が

言っていた通り、危険だ。噂ってのは全くの嘘か、または嘘の入っている本當か、もしくは本當か、のどれかだと俺は思う」「辞書でひいたかのようなことを言い出した。いや、光秀のことだ、かつこつけるため、先に辞書でひいていたのかもしれない。

「それで？」

「だからな、まず俺が今日一日怜について調べてみる。それで明日、会つてみるつてのはどーだ？」

「いいけど、それなら僕も一緒に調べるよ?..」

「いや、お前は足手まといだ。俺一人で調べる。お前はいろいろ考えたいことがあるだろ? 今日は家で休んでる」

そう言うと光秀は脱兎の如く去つて行つた。

「はやつ! ちよつ、待つ……。はあ、まあいいか、僕は僕で調べてみよつ」「

どこに行こうかな?

そうだ! 紺城家に行つてみよつ、じいちゃんなら場所がわかるはずだ。

……それにはまず謝らないとな。

そして家。

「じいちゃん、ごめん。僕、やつぱり、希望があるなら、妹を救うこと諦めたくない。紺城さん家、教えて」

「いいんだよ。ワシにはこうなることがわかつとつた。お前は優しく、妹思いの子だものな。よし、じゃあ紺城さん家を教えよう」その後、紺城さん家を教えてもらつたが、何度も迷い、何回も人に道を聞き、やつとのことで辿り着いた。

この辺、迷路みたいだな。

「すみません、誰かいませんか

声をかけると、すぐにおじいさんが出てきた。

「はいはい、おや? どなたかな?」

「僕、今河翔といいます。ちよつと、尋ねたいことがありますました」

「今河、今河……。あつ、もしかして『糸城さんのお孫さんかな?』

「あつ、はい」

「これはこれは。」の辺り迷路のように入り組んでいたが、大変だつたことでしょう。中に入つてお茶でもどうぞ」

「あつ、ありがとうございます」

そうして、中に入らせもらつた。中にはアンティークな時計や、アンティークな椅子等、とにかくアンティークなものがいっぱいあつた。アンティークグッズにみとれていると、糸城さんはお茶とお菓子を持ってきてくれた。

「……で、翔君は何について知りたいのかな?」

「伝説の石つて知っていますか?」

その言葉を言つた途端、糸城さんの目の色が変わつたように見えた。「ふむ、成る程。どこからお話ししたらよいかな。翔君、君はどこまで知つていいんだい?」

「えつと、秘靈石で願いが叶うとしか……」

糸城さんはお茶を一口、口に含むと、湯飲みをコトン、とテーブルに置き、話し始めた。

怜君（後書き）

ただいま前書きを頑張りでおつます。

怜君／怪物！？

「成る程。実は伝説の石は四種類あるのです」「えつ、そんなこと、じいちゃんに聞いてない」

「今から話すこととは吉さんと語り合った後、私が独自に調べたものですから」

「そなんですか、それで」

僕も湯飲みを口に近づけ、一口飲んだが、話しに夢中で、僕が、猫舌だとこうことを忘れていた。

「熱つ」

紺城さんは麦茶の方が良かつたかな、といいながら、テーブルを立ち、麦茶を持ってくれた。すみません、お手数かけます。

紺城さんは「ホン」と軽く咳払いをすると、話し始めた。

「そう、伝説の石は、無結晶、劣聖石、秘靈石、神聖石とあります。昔々の話になりますが、遙か昔、宇宙が出来る前の話。神々は神を襲う強大な怪物、ダイオスにほとほと困り果てておった。そこで、北、南、東、西の四大神が集まり、その全ての力を使い尽くし、何でも願いの叶う一つの石を作った。それが、神聖石なのです。そして神達はその石でダイオスを倒そうと考えた。しかし、その時にはダイオスは神の勇者、マグカイルによつて倒されていた。その後すぐには神聖石をめぐつての争いが始まつた。無結晶はそんな争いを嘆いた女神達の悲し涙だと伝えられています。ちなみに秘靈石は、神が、劣聖石は天使が四大神の神聖石を真似て作ったものだと言われています」

「へへ、そなんですか」

「そして神聖石は一つ、秘靈石と劣聖石は各地に、無結晶は一ヵ所にたくさんあるそうです」

「へへ、それで？それで？」

「申し訳ないが、こんなことぐらいです。私が知つているのは、

「いえ、とても役に立ちました。ありがとうございました」

「ホツ、ホツ、ホツ。こんな老人でも役に立つたと言われると、嬉しくなりますよ。すまないね。…孫の怜ならもつと知っているかもしないなあ。あの子はさらに調べ上げていたからなあ」「えつ、お孫さん、やつぱり怜君なんですか？」

「ええ、そうです」

「あつ、ありがとうございました」

そう言って、僕は怜君宅を後にした。

「あつ、これ、翔君、お茶もお菓子もまだまだ……、フフフ、せつかちなのは『吉さん』に似てるな」

へへっ。また一步進めた。怜君に早く会いたいな。期待を膨らませて今日は家へ帰った。

そして翌朝、学校に向かう途中、光秀に会った。

「よう、翔。今日は一段といきいきしてんな。」

「まあね。ところで、怜君についての情報はどうだった?」

「ああ。昨日学校で一日中調べた結果、重大なことがわかつた」

光秀が真顔になつた。つられて、僕も真顔になる。

「実は、あいつは……」

「うん」

僕は思わず唾を飲みこんだ。

「モテるんだ」

「は?」

そこで一種の沈黙が続いた。僕の聞き間違いじゃないか、と思つてもう一度聞いてみる。

「何だつて?」

「だ、か、ら、モテるんだよ、怜の奴は

「……それで」

「それだけだ」

フツ、思つた以上に使えない男よの、会田光秀。とか思いながら、

一応、つっこんでやつた。

「……それ、重大でもなんでもないから」

「だつてよ～、悔しくねえか、翔。俺達モテねえ奴にとつてはよ

」

光秀は泣きそうな声で言った。

「君と一緒にするな。……他に情報はなかつたの？」

少しキレぎみの僕なのであつた。

「はうつ、疎外された。俺達は親友じやなかつたのか……。

……、まあいいか、いや、良くねえけど」

どつちだよ。だが、立ち直りが早いのは僕が唯一認める「イツのい

い所だ。

「それで？」

「ああ、他には相手が誰だらつと攻撃する、とか、相手の心を読む、とか」

「心を読む？」

それって、伝説の石に何か関係があるのかな？

「あとな～、驚いたのが、口が裂けてて、どんな物でも食いつらし！」

そして耳が四つあって、一キロ先の話まで聞こえるとか、そして足

が三本、手が八本、それで様々なことが出来るとか

僕は額に手を当て、しばらくどう反応すべきか考えていたが、結局、

「妖怪か！」

奴の頭を力の限りじついてやつた。

怜君の登場！

「いつたあ～、お前のチョップは殺人的なんだよ、翔」  
光秀は涙目で頭を抱えている。大げさな。

「いや、でも俺の情報収集能力は確かだぜ」

「噂よりも君の情報収集能力の方が怪しいよ」

僕はため息をはき、空を見上げた。今日は雲のない快晴だ。目を閉じると、車が近づいたり、遠ざかつたり、それと、さつきから光秀が網ごしに蹴つているサッカーボールの音が聞こえた。そして、目を開く。

「こっちも伝説の石についてわかつたことがあるんだ」「え～、何だよ」

僕は紺城さんに聞いたことを全て光秀に話した。

「伝説の石が四種類も？へ～、じゃあ俺達が手に入れた石って何だつたんだろうな？」

「何つて、秘靈石でしょ？……あつ！」

「そうだよ、地図には伝説の石としか書いていなかつただろ？」

今、思い出した。紺城さんは神聖石が願いの叶う石だと言つていた。秘靈石ではおそらく、願いは叶わないのかもしない。そして、僕の持つている石、それは、秘靈石ですらないのかも知れない、ということ。

少し、わかつた気がする。

「でもまだわからぬことが多いな。僕の持つている石には何の力があるんだ？伝説の石つていうくらいだから、何かありそうだけどとにかく、怜君に会えばもつとわかるはずだ」

「そうだな、推測してても始まらねえもんな」

「…そして学校へ着いた。

僕は光秀とまず、怜君のクラス、六年C組に行くことにした。  
行ってみると、クラスの中には、数人残つて勉強している人達がい

た。

「すみませーん、怜君知りませんか？」

すると、怜君は図書室に行つたという。お礼を言い、図書室へ行くと、図書室委員がカウンターで本を読んでいた。辺りをキヨロキヨ口探しても、怪物らしき人は見当たらない。みんな本好きの読書っ子ばかりだ。

「お~い、そこのポツチャリメガネの図書委員、怜の奴知らないか？」

と光秀が聞くと、今度は音楽室に行つたといつ。

早速行つてみると、

「誰もいねえ。」

「どうなつているんだろ?」

「全くだ、こーゆうの、タライ回しつていうんじやないつけ?」

僕と光秀は少々疲労ぎみだ。

その後、学校中を探してみたが、ひとつひとつ会えず、じ組に行くと、帰つた、と言つていたので、僕達も帰ることにした。そして、帰り道のこと、

「あ~、何で会えねえんだよ。怜の奴、俺らを避けてんじやねえか?

「まさか」

この時、背後に視線を感じて、僕と光秀は振り向いた。

「誰が逃げてるって?」

「まさか、お前が……」

「そうだ、俺が紺城怜だ。俺のことを探し回つている一人組がいるつて聞いてどんなゴツイ不良かと思えば、こんな優等生とトンガリとはな」

初めて怜君を見た印象は僕が想像していた筋肉「リラ」とは全く違っていた。きつしゃな体で髪は胴まで長く、ゴムでひとつくりに束ねていた。

身長も高校生ぐらいあるんじゃないかつて程で、声も声変わりして

ないのか、驚く程綺麗だった。

モテるのも頷ける。

「誰がトンガリだ！」

光秀は反発した。

「お前しかいないだろ。ところでお前ら、俺の噂を聞いて俺を探していたんだろ？ だつたら、腕にそうとうの自信があるってことだよな、ボーッとしてないでかかってこいやー！」

まずい、臨戦態勢だ。完全に誤解している。

「いや、違うんだ、怜君」

「こないんだつたらこっちから行くぜー！」

話を聞く耳もたない、といつた感じだ。

怜君は真っ直ぐこっちに向かってくる。僕があたふたしていくも向かってくるのは止めなかつたが、光秀の、

「やめろー、怜！」

という言葉に逆上したのか、僕から光秀の方に攻撃対象を変えた。

「氣安く、俺の名を呼ぶな！」

怜君のパンチが光秀に炸裂するかつて時に僕はある言葉を発した。

## 伝説の石（前書き）

伝説の石を手に入れるも、妹の様子は良くならない。

翔は伝説の石に詳しい人物、紺城さんに会いに行き、伝説の石は4種類あることが判明。しかし、それしかわからず、結局、さらに詳しく知っているという孫（僕たちにとつては同級生）の紺城怜君に会いに行くことに。

学校中をさがしたが、見つからず、帰り道に声をかけてきたのはなんと怜君だった。いつも、けんかをうつているらしい怜君は僕たちにも殴りかかってきた。

### 主な登場人物

翔……小六で主人公である僕 光秀……僕の親友 美智子……学校の級長を務めている

## 伝説の石

「伝説の石！」

間一髪、光秀の鼻先で怜君の拳は止まっていた。

怜君が僕の方に振り向く。

「何だと？」

僕は言い直した。

「伝説の石って知ってる？」

「で、伝説の石……」

”伝説の石”と聞いて明らかに怜君の表情が変わった。

「ま、まさか、お前らは能力者？」

光秀は怜君のすんでのパンチに口をパクパクさせていたが、よひやく、まともに口を開いた。

「能力者だと？お前は何を知っているんだ、怜！」

「フ、フ、とぼけているのか？」

怜君の額からは冷や汗らしきものがでている。

「怜君、僕らは願いが叶うといわれて、伝説の石を探している」

怜君は相変わらず黙つたまま、こちらを直視している。

「そして見つけたんだ。実は今持つてる。秘靈石を。ほら、翔、見せてやれよ」

僕はあの無人島で手に入れた、秘靈石<sup>ミリョウシ</sup>をカバンから袋<sup>ふくろ</sup>と取り出すと怜君に見せた。

「成る程。フ、フハハハハ。そういうことか。お前らは何もわかつていなー」

僕と光秀は一瞬、顔を見合させた。

「どういうことだ？」

「お前らに教えてやる義理も義務も必要もないが、ここまで辿り着いたんだ、石について教えてやるよー」

「ありがとう、怜君」

怜君は上からものを見る目になると、

「フンッ。全く笑わせる。お前ら、そのお前らがいつ秘靈石で本当に願いが叶つたか？」

「そつ、それは今から叶つだらうよ」

光秀は確信が持てないのだろう。ちなみに僕も確信は持てない。むしろ叶わないんじやないかといつ考えの方が強い。

「トンガリ、お前は本当におめでたい奴だ。そつちの優等生はわかっているみたいだぜ」

「そうだ、お前の考へていいよつて、この石では願いはかなわん。どうしてだとと思う？」

「それは、伝説の石には四種類あるから？」

「さすが優等生。トンガリとは訳が違う」

何だと、このつ。と光秀は小さな声でそう言つたが、それ以上は我慢してくれたようだ。助かる。肝心なところを聞き逃すわけにはいかない。

「その通りだ。詳しく話せば、それは伝説の石の一つ、無結晶だ。無結晶の力は能力を消す、それだけだ」

僕は聞いているうちに一つの疑問が浮上した。

「さつきから聞く能力や能力者って？」

「だからそれを今から説明する。だいたい伝説の石つていうのは能力に関するものなんだ」

「えつ、じゃあ願いを叶えられる石なんて存在しないの？」

僕は心中で何かが崩れゆく感覚を得た。と、同時に泣き声うになつた。

「だから、最後までよく聞け！さつきも言つた通り、伝説の石つてのは能力を手に入れるもの。だが一つだけ例外がある

「それが神聖石……か」

「トンガリにしては物分かりがいいな。そうだ、神聖石はひとつだけ願いを叶える石なんだ」

やはり、思つてた通りだった。

「能力、と言つていたが、具体的にどんななんだ？」

「例えば、劣聖石の場合、手に入れたのが行く力だとすると、何処へでも行くことができる。つまり一歩できるんだ。そして秘靈石はさらにその能力をアップさせるものだ。無結晶と神聖石は……さつき言つたな」

……、凄く曖昧でわかりづらい。光秀の方を見ると、……うん、彼も分かっていないようだ。片手を顎にあてて悩んでいた。

そんな僕らを見て、怜君は

「まあ、能力を手にいれれば分かる」

## 云説の右（後書き）

2010.11/3  
前書き更新しました。

## 伝説の石と地図

他にもいろいろ質問した。怜君は能力者なのか、とか、神聖石はどこにあるのかとか。仲間になつてはもらえないかとか。

なぜそんなことを聞いたかというと、もし、怜君が能力者であるのなら、協力してくれれば、これ以上心強いこともないし、僕ら一人は（いや、少なくとも僕は）能力に興味がない、というよりむしろ普通の人でよかつたわけで、神聖石が手に入れられるのであれば、直で行つた方が早いからだ。

だが、そんな甘いものではなかつた。

「俺は能力者だが、リミットルームすら使えないお前らと組する気はない」

とか、

「神聖石の場所を知つていたら俺がゆうに手に入れている」とか、全然甘かつた。

「そうだよな、とか思いつつ、お礼を言つて、去るうとした時、

「ちなみに、神聖石の力を手に入れるには能力者であることが、絶対条件らしい」

と、言われ、能力者になることを余儀なくされた僕だつた。それとリミットルームについて聞きたかったのだが、恐らく能力に関係するものだろう、聞くにはまだ早いかなと思い、それに怜君もこれ以上は疲れるだろうと思い、今日のところはお礼を言つて帰ることにした。

そして次の日、僕は光秀の家へ向かつた。電話もしたのだが、何ぶん電話に……くだらないダジャレになりそつたので、これ以上言つのはやめた。

玄関先でチャイムを鳴らし、大きな声で、

「みづひ～で君」

と呼ぶと、ダダダダダ。いつもの、一階から降りてくる音が聞こえた。

「よつ、どうした」

光秀は今起きたのか、パジャマ姿に寝ぼけまなし、ついでにあぐびまする始末。僕は呆れながらも

「どうした？ ジやないよ、早く伝説の石を探しに行こう」

「お前、場所分かるのか？」

「あつ！」

しまった。それを計算に入れてなかつた。

「だろ？ どうしようもねえじゃん」

「ちょっと待つて」

僕はもう少しで何かを思いだしそうだった。……そうだ！

「無結晶の地図は家の倉庫にあつたんだから、まだあるかも知れない。一緒に探してみようよ。」

「分かつた、じゃあ準備すっからそこで待つて」

……そして十分後。

「よし、行くぞ」

そして僕ん家の倉庫に向かつた。

「翔、あつたか？」

「うーん、ないなあ」

ガサゴソと探すものの、地図らしきものはみつかない。みつかつたのは、昔の鎌びた刀やら、ボロボロの絵やら。

たまに猫やコウモリの赤ちゃんが出る時もあるのだが、今回は出なかつた。まあ、じいちゃんが定期的に掃除しているからな。二階もあるというのに、三時間でまだ一階の一 部分しか探せてない。今日中に全部調べられるだろうか？

……そして日の光も力を失つて倉庫の中はだいぶ暗くなつていた。

「ハア、ハア、こりやあねえぜ、翔」

「諦めんなよ光秀。また明日調べよう」

「そうだな

「この地図以外に本当にはないのかなあ」

僕は、無結晶の地図を拡げたまま外に出た。

日が沈んで暗くなっていたのではなく、それは軽く、雨が降つていたからだった。

「おい翔、地図、濡れてるぞ」

「あっ、やばっ」

そして急いで僕の家の中に入つた。

光秀は地図を見ると、

「おい、貸せ」

と、僕から地図を奪いとり、雨の中に入つて行つた。

「そんなことしたら地図が……？」

光秀は地図を拡げたままじっと見ている。

「翔、これは……」

肩を震わせながら地図を見ている光秀を不思議に思いながら後ろから光秀の持っているそれを覗きこむと、なんと、地図が日本地図に変わつており、複数のマークが追加されている。

僕達が行つた無結晶の場所には三点リーダーのマーク、他には太陽のマーク、四角のマーク、山のマーク、があつた。太陽や四角のマークはたくさん点在していたが、三点リーダーと山のマークは一つずつしかなかつた。

## 伝説の石→地図（後書き）

すみません、だいぶ遅れました。次はもう少し早いペースでうつてるかなあ。

## 伝説の石、洞窟

「い、これって」

「そう、そうだよ翔。これは全ての伝説の石、そのありがだ」  
雨で濡れて何故地図が変化したのかはわからないが、（特殊なイン  
クなのかもしれない。）とにかく、ここからが本当の始まりだ。

「やつたな翔、へーイ」

雨の中、僕らは手のひらを合わせ、叩きあつた。

「太陽と四角つてなんだろ?」

「さあ?でも三點リーダーは俺たちが行つたところだから、無結晶  
だよな」

「つてことは山は神聖石だね」

「ああ、一つしかないからな」

僕らは着替え、（光秀には僕のを貸した）濡れた体を拭きながら話  
していた。結局、太陽と四角はわからなかつたので、怜君と連絡  
をとることにした。

じこひやんに紺城さん家の電話番号を聞き、電話をかけると、真っ  
先に怜くんが出てくれた。

そして、地図のことを話した。

「成る程、太陽と四角について教えて欲しいと。……甘つたれるな  
！」

光秀にも聞こえるのではないかと言つほどの大聲だった。やはり聞  
こえたのか、光秀は俺にも聞こえるようにしろ、と勝手に電話のボ  
タンをひとつ押した。

「え?」

「俺はな、ほんと自分で調べた。危険なこともあつたさ。だが、  
それを乗り越えて能力者になつたんだ。俺はお前らに聞きたい。所

詮、そのレベルなのか、と」

「なんだと怜つ。こっちの事情も知らないくせに！」

光秀が割り込んできた。話をややこしくしないで欲しいなあ、もう。「なんだ、トンガリもいたのか。お前らの事情なんて知らないが、俺を仲間にしたくば、最低限、能力者になつてみせろ」

僕はその言葉に身震いした。……怜君はかつこいい。

「わかつたよ。怜君。まず、僕らの力でなんとかする」「フツ、そうか。勝手にするといい」

僕には怜君が嬉しそうに微笑する姿が頭に浮かんできた。

明日、一番近い太陽のマークのある島に向かう事にした。島の名前を本物の日本地図と照らし合わせたからバツチリ！

何故太陽のマークかというと、どうせ劣聖石か秘靈石なのだから、光秀が、太陽に行こう、と決めたからだ。

そのうち能力が手に入るのは劣聖石のみ。はたしてどちらが手に入るやら。

そして、翌日。

僕は光秀ん家に向かつた。

「旅費もおじいちゃんに貰つたし、よし、出発だ

「……と、言いたいところだが」

僕はノリ気だったのだが、光秀の一言で一気にテンションが下がってしまった。

「何だよ、光秀！」

「実は美智子が以前に、冒険するときは私も連れてつて、つて言つていたんだけど、どうする？」

「いいんじゃない。一人より三人の方が心強いし」

「またそれか、お前。……まあ、俺はいいけどよ」

そうして級長も連れて行くことになった。

「よし、今度こそ、出発だ」

「お~」

「イヒー！」

級長は冒険に行くとき、やけにテンションが高い。……いや、いつもか。

ところで、級長の格好だが、ハイキングウェアに大きめのリュックサックという、何か少し勘違いしているんじゃないか、といえる格好だったが、まあ、あえてつっこまなかつた。以前もそうだったしね。

……そして。

「たぶん、この洞窟だと思つ。ほら、ここに太陽のマークが」  
その洞窟の上には微かだが、太陽のマークが刻まれていた。しっかりと刻まれていないところが年月の経過を思わせる。

「でつけ~」

「広そうね……」

洞窟の中に入るとバサバサと何か黒いものが飛んできた。とつさにみんなしゃがんだ。

「キヤア、何？」

「見てよ、ただのコウモリだよ」

僕は懐中電灯を上に当てた。

「しかし、あれはマジビビるな」

「無結晶の時の洞窟と違つてまだ先は長そうだ。注意して進もう」

「ああ」

「そうね」

## 村上 薫（前書き）

伝説の石を手に入れるも、妹の様子はよくならない。

伝説の石に詳しい怜君に会い、伝説の石は神聖石、秘靈石、劣聖石、無結晶があり、そのうち願いが叶うのは神聖石だけで、残りは能力に関するものだという。神聖石を手に入れるには、能力者であることが必要と聞かされ、怜君を誘つも、断られる。しかたなく、能力者になるという覚悟を決め、偶然手に入つた、すべての伝説の石のありがが書かれている地図をみて、そのうちのひとつ洞窟に入るのだった。

### 主な登場人物

翔……小六で主人公である僕 光秀……僕の親友 美智子……学校の級長を務めている 怜君……能力者であり、同級生

進んで少しすると、いきなり明るくなつた。

そう、まるで暗い部屋に電気のスイッチを入れた時のように。光の元は分からぬ。

でもかなり遠くまで見える。どうなつてるんだろう。

やがて、石の扉の前に着いた。その扉にはどつてがなく、代わりに人一人が手をかける窪みがある。文字が彫られており、よく見ると、『警告！能力者でないものこの先入るべからず』

と、あつた。

「どうする？」

「ん~、私は引き返した方がいいと思うな。対策を練るとか、他の洞窟に行くとか」

「俺はそうは思わないぜ」

……と言つて、光秀は石の扉の窪みに手をかけた。

光秀一人の力じゅあ開かないだろう、と思つたが扉はいとも簡単に開いた。簡単に開き過ぎて力いっぱい開こうとしていた光秀がこけたぐら이다。

「いててて、何なんだよ」

その後、すぐに「ゴゴゴゴゴ」、という大きな音と地震かと思うほどの大きな揺れを感じた。そして突如聞こえた僕ら以外の人の声。

「前に走れっ！」

振り向くと、無精髭をはやし、革ジャンを着た大人の男性がいた。僕らはあまりの出来事に理解しようといっぱいといっぱいですぐに動くことができなかつた。

「いいから走れ！」

今度は怒鳴られた。

はつ、と我に気づき、つい、はい、と言つて、敬礼まではうになつたが、そこはせず、僕らは全速力で洞窟の深部に向かつて走つ

て行つた。

走つている最中に、そのお兄さんは（おじさんと言つたら失礼かな、二十歳半ばに見える）岩が上部から転がつて来ていることを教えてくれた。

えへと、ここは下りだから、岩が丸いとすれば、瞬時にここまで来る。とか悠長に考え方をしてる間に後ろを向くと、すでに高速で転がつてくる岩が見えていた。

駄目かと思われた瞬間、

「仕方ない……」

何かがボソッと聞こえ、（級長なんか悲鳴をあげていたが）目を開いたら、揺れも音もあの岩さえも消えていた。

「何がおきたんだ？」

光秀も潰されると思ってか、手を構えていた。

「私の、能力だ。」

お兄さんが応えた。

「能力で……消した？」

僕は信じられなかつた。まるで夢の中にいるのではないかという感覚さえあつた。能力のために命をかける（岩のこと）といふこと、そして、能力で岩を消せること。もしかしたら人の命も消せるのではないか？怖い。洞窟も、この人も。

ここまで危険だなんて聞いていいない！

僕は、僕は、妹の為なら命をかける覚悟はある。でも、光秀や級長の命もかけることは出来ない。もし一人が、途中で……。なんてことを考えると、怖くてたまらなかつた。お礼を……、忘れていた。

「あっ、ありがとうござります」

「礼はいい。だが、無謀過ぎるな。洞窟に入る時から見てたが、能力者はいないと見える」

お兄さんは見据えたような目で僕らを見た。

「ああ、そうだけど、つけてたなんて、趣味悪いんじゃないの、つか、おつさん誰？」

「ちょっと失礼じゃない？光秀」

お兄さんは襟を整えると、

「ああ、失礼した。私は村上 薫。ある方の命めいでここにきた。そちらは？」

僕らは話した。神聖石の力が欲しくて、能力者になろうと思つてのこと。

そして歩きながらいろいろ聞いた。

まず、薫さんは味方なのか、ということ。

薫さんは、今は。だが、今後はわからん。

と言つてくれた。その言葉は僕に安心感を<sub>与</sub>えた。

なんたつて、能力者が一緒にいるのだから、まず、僕らの身の安全は保証されているようなものだろう。その後会つことなんてないだろつ。

村上 薫（後書き）

小説について勉強しようと。せつこうつい想つ今日この頃です。

2010.11/3 前書き更新しました。……後書きよりも、か  
なりしんどいです。

## あまたの石

洞窟の明かりや石の扉、岩のことも聞いたが、そういう場所なんだ、の一言で済ませられてしまった。

他には太陽のマークは能力の手に入る方なのか、ということ。

薫さんはそうだ、と言った。光秀の勘もバカに出来ないわけだ。そしてリミットルームについて。話を聞くと、能力にはそれが効く範囲や形があつてそれが見えるようになる技らしい。能力者じゃないと使えないそうだ。

他にも能力は進化するものもある、とか、秘靈石を手に入れれば能力の解放（怜君の言つていたパワーアップだろ）も出来る、と教えてくれた。

いい人なのかも知れない。劣聖石は早いもん勝ち、ということになつた。まあ、仕方ないことなんだろう。絶対負けるもんか。

やがて、またしても石の扉の前にたどり着いた。  
その扉には、

『能力者であるもの進むべからず』  
と、書いてあった。

僕は疑問に思つた。

「あれ、これって……」

続きを光秀が言つてくれた。

「似てる……よな」

「これは！」

薫さんは何か知つていそだつた。聞いてみると、

「これは、能力者が入ると、トラップが作動しますよ」という意味だ」「つてことは、さつきは私達が進んだから岩が……」

「そういうことだ。私がここから先に進めばトラップが作動する。

恐らく先程のものより強力なものが発動するだろ。私一人だけな

ら」の洞窟程度のトラップ、くぐり抜けることは容易いが……

「ちょっと待て。早い者勝ちとは言つたが、俺達だって、頑張つてここまで来たんだ。いくらなんでもそれは卑怯じやないか？」

光秀がぐいぐいと言い寄つた。

「では、お前達にチャンスをやろう」

半ば諦めていたので、その言葉は意外だつた。下を向いていた僕は瞬時に薰さんを見た。

「えつ？」

「確かに、平等ではないな。だから、チャンスを与える。お前達がまず、先に行き石を手に入れればお前達の勝ち。無理だと思つたら、戻つてこい。その時はお前達の負けで、もちろん石は私が手に入れる。まあ、どちらにしろこの洞窟は危険だ。帰りは私が送ろう」

「わかった、俺達の勇気をみせてやらあ。いくぞ、翔、美智子」  
「なんで、お前がはりきつているんだよ、光秀。

……でもまあ、僕にも異存はない。

「うん！」

「もちろんよ」

しかし、光秀も級長も恐怖という感覚が麻痺しているのだろうか？

……そして、僕ら二人は先に進んだ。

すると、一つの部屋に着いた。広さはとてつと、小学校の体育館ぐらいだらうか？そこにこれでもかつて程、石が並べられてあつた。形も大きさも様々な石が。

「これは、普通に探しても無理じやない？」  
級長はすでに疲れている感じがする。

「ほら、片つ端から探すぞ、翔」

「こうと、光秀は本当に片つ端から吟味し始めた。

「まず絞らないといけなんでもこの数は何日かかつても無理だよ  
「そうよね。形とか、大きさとか」

「怜君にあつた時の話なんだけど、怜君、伝説の石を持つてゐ、つ

て言つたら、不思議そうな顔をしてた。だから、たぶん大きさは人が持てる大きさではない、つまり岩なんじゃないかな」

級長は手のひらをグーで叩いて、

「なーる。でも並べられている。石の中にはそれほどでかいのはないわよ？」

遠くから光秀の、お前らも手伝えよー、といつ声が聞こえる。周りを見渡すと、僕達が入った入口の両脇にウーのような形の岩があつた。

「あれね」

級長も見つけたようだ。

光秀も呼んで話をした。

「でもよお、二つあるつてことはどっちかトラップでことだよな?」

僕と級長は顔を見合わせた。その可能性は考えてなかつた。

## 能力者 成樹、暴走、困惑、そして

「慎重にいかないといけないわね」

……そして、三十分悩んだが、わからなかつた。光秀がわからないのならないだろ、と言い出して、右の岩に触れようとしたその時、級長が、あつ、と声を出した。

その声にびくつ、と反応して光秀の手は止まつていた。

「なんだよ、美智子」

「懐中電灯」

「は？」

僕も一瞬解らなかつた。

「ほら、あの砂は懐中電灯にあてるとキラキラ光つたじやない。でも外にでて太陽にあてても光らなかつた。つまり……」

「人工的な光に反応するってことかな」

「おっし、とにかくやってみよっぜ」

そして、僕が懐中電灯をあててみる。まず、右。

「……光らないね」

「次よ、次！」

そして、左に懐中電灯をあてると、なんと、淡い緑色に光つた。つまり、左が正解だつたわけだ。

「良かつた。俺、触らなくて」

光秀は、は〜、と溜め息をついている。

「と、こ、る、で！」

「何？ 級長」

「誰が能力者になるの？」

「そこだよな」

悩んだ末、じんけんで決めることにして、結果、級長が勝つた。級長が岩に触れると、今度は級長の体が、淡い緑色に発光した。丈夫なのだろうか？ 聞くと、

「大丈夫よ」

と言つていたから無害なのだろう。

そして、光が消えた。

「わかつた、これは、変える力ね。触れた物を変化させる力」

「へ～。あとで見せてよ、美智子」

僕は片手を上げて、

「はいっ、僕も見たいです。級長」

いつにもなく興奮していた。

「もちろん、早速、私も力を使いたいけど、お兄さんを待たせてるし、ここを出てからにしますよ」

と、いうことで、薫さんがいる場所まで戻った。

薫さんは律儀に同じ場所で待つてくれた。

「それで、どっちなんだ？」

薫さんは僕達を順々に見、最後に級長を見た時、目を見開いた。

「驚いた。まさか、お前達だけで石の力を手にしてしまうとは。余程の強運の持ち主と見える」

「強運なんじやなくつて実力だつづーの」

チョップ、チョップ～、と、光秀は薫さんにチョップをくらわせている。世界広しといえど、薫さん程の能力者にチョップをくらわせられるのはこのバカくらいのものだろう。

「ははっ、そうかもしないな」

薫さんが笑つた。……かつこいい。どうして、怜君といい薫さんといい能力者というのはかつこいいんだろう。能力者に対する見方がひとつ変わつた。

僕もなつてみたい。あんな風にかつこよくなりたい。

「どうして私が能力者だつてわかつたんですか？」

「先程も言つたが、リミットルームだ」

「ああ、能力の範囲がわかるつてやつか。能力者かそうでないかも分かるつてわけ？」

「そうだ。訓練すれば、いづれ見えるようにならう。まあ、訓練し

た能力者は能力を使いたくない時は能力を使わないこともできる。  
その時は範囲も見えないがな」

「へえ～」

そして、歩いているうちに、外に着いた。薰さんは、喋っているうち、気がつけば、いなくなっていた。僕達は船に乗り、三浦さんに能力を手に入れたことを話した。

「ところで、ワシに、その能力を見せてくれんねえかな」

「三浦さんの頼みじやあ、断るわけにはいかないよね、級長」

「そうやう、外にでたら見せてくれるって言つたじやん」

級長は、そうだったわね。というと、自分のリュックサックを下ろそうとしたその時、リュックサックが消え、級長が手にしていたのは十センチ四方の箱だった。

「お～」

皆、感嘆していたが、当の本人は錯乱していた。

「え？え？なんで？」

「どうしたんだよ、美智子。成功したじやんか」

「私、箱にしようとはしてたんだけど、リュックサックの中のものを取り出して変化させようと思つていたんだ。でもリュックサックに触れた途端に……」

## プチ仙人』伝説のおじいさん（前書き）

伝説の石を手に入れるも、妹の様子は良くならない。

伝説の石が四種類あると判明。僕たちが手に入れたのは願いの叶う石ではなかつたといつ。そして願いの叶う石、神聖石を手に入れるためには能力者になることが必須らしい。僕たちは偶然手に入つた、伝説の石の地図を見て、洞窟に入る。軽率な行動をとつた光秀は罠を作動させてしまい、死ぬかというときに現れたのは能力者、村上薰さんだつた。薰さんは罠を破壊し、僕たちを助けると、伝説の石は早いもの勝ち、と言つたが、先に行かせてくれ、僕たち（級長だけ）は見事、伝説の石の力を手に入れた。

帰りの船で能力を披露するが、それは暴走した能力だつた。

### 主な登場人物

翔……小六で主人公である僕 光秀……僕の親友 美智子……学校の級長を務めている 怜君……能力者であり、同級生 三浦さん……船の操縦士

## プチ仙人＝伝説のおじいさん

皆、だれもしゃべれなかつた。それはつまり、級長が能力をコントロール出来てないことだと、みんなわかっているからだ。それがどれ程恐ろしい事か。

三浦さんが沈黙を破つた。

「リュックサックをイメージしてその箱に触れば元に戻せるんじゃねえか？」

級長はこくこくと頷くと、目を閉じて箱に触れた。すると、もとのリュックサックに戻つた。

「私、触れたもの全てを変化させてしまうの？」

級長は今にも泣き出しそうだ。

「大丈夫だつて、美智子。つーか、むしろ、便利じゃん？」

光秀はフォローしたつもりなのだろうが、なつてない。

僕は級長にかける言葉を持つていなかつた。それどころか、一瞬、僕じやなくて良かつたとまで思つてしまつた。僕つて、最低な奴だ、と自己嫌悪した。

頼みの綱は……怜君しかいない。

ということで、怜君の家に向かい、怜君に事情を話した。

「成る程な。しかし暴走する能力は珍しい、むしろ、レアなんだろう。それほど強力だつてことだ。羨ましい限りだ」

「なんだと、こっちは困つてるんだよ、怜！」

怜君は、はあ、と溜め息をつき、どうどうと光秀をなだめた。

「落ち着け、トンガリ。俺の師匠に会いに行け。まだ3時、夕方までには着くはずさ」

光秀は俺は動物かー。と怒つていたが、それは無視して、僕は聞いた。

「本当に、なおせるんだね？」

「勘違いするな、コントロール出来るようにするだけだ。少しの間、

「師匠のもとで修行するといい」

級長はわかつた、と頷いた。そして、怜君に地図を書いてもらい、出発した。

「山に住んでいるらしい。小さな山だけ。怜君が言つてはプチ仙人だつて言つてた」

「仙人に、プチもプチじゃないもあんのかよ……」

僕と光秀は話しながら向かって行つたが、途中、級長が話すことはなかつた。それほど、ブルーだつたつてことだらう。山はさほど険しくなく、なだらかなものだつた。

それがせめてもの救いだ。やがて、一軒の家屋を見つけた。見渡しだがチャイムもなく、窓も塗装もボロボロで、家というよりも、小屋という感じがした。

本当にこんなところに人が住んでいるんだろうか？

まず、僕はノックをした。

「なんだろうか？」

声からすると、60代のおじいさんっぽい。僕は能力が暴走した旨を伝えた。

すると中から、入りなさい、と聞こえたので、僕達は中に入つた。中は外と全く違つて見えた。ボロいのは仕方ないとして、きれいだつた。

並べられた、いすやテーブル、それにほこり一つないようになつて見えた。

おじいさんは目の前のテーブルイスに座つている。

しかし、ただのおじいさんというにはあまりにも聰明なオーラと気品に包まれている。

おじいさんは僕達を順々に見ると、

「お嬢さんか

薰さんと同じく、見抜いた。

「分かつた、こっちに来なさい」

級長が前に出た。目が潤んでいる。今まで泣いていたようだ。……

それもそうか。

おじこさんは両手を開じて左手を級長の額に当てるべく、あぐに丼を開いた。

「分かった」

手を当てただけで分かるところはおじこさんも能力者なんだろう。

おじこさんは説明してくれた。級長の能力は物を手で触れることによって発動する。

そして、考えたもの向こでも変えうことができる。ただし、イメージできる範囲で。

そして変えることができるのは一回三回まで。

操るにはよほど精神力が必要。とのことだった。

「結局、どうすればいいんだ、じいさん。そこがわかつてねーじゃん」

光秀もいい加減焦れつくなつたのだらう。僕も言おうと思つていたくらいだ。

「お嬢さんは、えーと……」

僕達は自己紹介した。おじこさんは源史朗さんとこりひこ。

「美智子ちゃんは、能力をどうしたいのかな?」

「え……と、いいますと?」

プチ仙人』伝説のおじいさん（後書き）

2010・11／3

前書き更新しました。

## ダブルフォース決断

「だから、ほれ、能力を無くしたいのか、使いこなしたいのか、どっちかな？」

級長は下を向き、悩んでいるようだ。

「美智子、悩む必要なんてないだろ」

「そうだよ、級長、無くしたい、と言いなよ」

級長の答えは僕らの予想に反したものだった。

級長は前を向き、決意に満ちた目で「ひつ」言った。

「私、使いこなしたいです」

僕と光秀は級長を見たが、その瞳は変わらなかつた。ゲンさん（源史朗さん）は自分の足のふとももをポンッと叩くと、

「わかつた。では君の能力を使いやさしいように縛ろう」

「縛る？」

僕は疑問に思つた。先程、能力で、級長の能力のことがわかつたのではなかつたのか。じゃあ……縛るって？ 考えてもわからない。

「さて、普段は能力を封じた状態にしよう。だが、一時的に能力を使う時、何の仕草を能力発動の又、能力を封じる、鍵にしたい、かな？ 普段生活してて、しないことがいいと思つのじゃが」

級長は顎に手を当てて、悩んだかと思えば、すぐに答えた。

「発動は空中に五角形を描く、封印は空中に三角形を描く。で、お願いします」

「その通りにしよつ」

ゲンさんは今度は右手を級長の額に当てた。

「よし、終わりじや。ためしに翔君に触つて『らん』

級長は僕に触れよつとしているが、その手はプルプル震えている。

僕は目をつむつた。ゲンさんを信じていられないわけじゃないけど。記憶によれば、リュックを箱に変化させて、それを元に戻した。

つまり、能力を使ったのは一回。あと一回残っている。級長が僕を

触れる時考える」とつて? そんなことを考えていると、悲鳴が聞こえた。

「ぎやー、神様、どうか、死ぬ時は女の子に囮まれて死にたかった」目を開くと、光秀が大袈裟に演技していた。級長、どうやら光秀に触れたらしい。だが、光秀は光秀のままだった。

「良かった」

級長は胸を撫で下ろしている。

「ふつふつふ」

ゲンさんは笑いつぱなしだった。

「怜君にお礼言わないと」

「美智子、その前にお礼言つべき人が他にいるだろ?」

「あ」

その後、僕達はゲンさんにお礼を言つた。

級長はリミットルーム（能力の範囲が見えるようになる技）を使えるようになりたいと、いいだし、ゲンさんはそれを了承した。

僕が、次に能力を手に入れるのに、能力者がいないのは痛いと、言つたら、ゲンさんが、能力者の孫を貸してやろう、といつのでそれで妥協した。

「ところで先程言つていた、怜君とは? もしや、坊のことかな?」話しているうち、怜君は小さい時、ゲンさんの弟子で、坊、と呼ばれていたことが判明した。光秀が、今度からかつてやひ、と言つていた。やめとけって。

「プチ仙人、プチ仙人つてな、山が小さいからじやううか、かわいかつたもんじや」

……怜君は、身長が小さいからだと言つていたが、さすがにそんなことは言えない。つーか、身長一メートルぐらいの仙人がいたら、それはそれで恐いと思うが。

何故能力を一つ持つてゐるのかを聞くと、

「左手は分かる力、右手は縛る力。普通は能力を一つ手に入れるな

どできん。能力と能力は反発するからな。わしは……。まあ、いづれ、坊にでも聞くといい。だが、この力を得る為には、あまりにリスクが高すぎた」

そう言つたゲンさんの目はどこか、遠いところを見ていた。  
それから、僕達は級長と別れ、帰ることにした。

帰り道。

「光秀、僕、今、思い出したんだけど、怜君、無結晶は能力を消す力だと言つてた。あれ使えば、級長の能力、消せてあげられたんじゃないかな?」

「ああ、そう言えばそうだつけな。でもあいつがああ決めたんだから、もう、いいじゃねえか」

辺りは真っ暗だ。

「それと何で級長はあんなに嫌がつていた能力を逆にコントロールしようと決めたんだろう?」

「ああ、もう、細かいこと言いつこなし。俺達は男子。乙女の心が分かるはずないだろ?」

暗い道、街の光を目指して、人工的に作られた山道を歩む一人。星を見る。

なあ、上(星)と下(街)の光、どっちが好き?

僕?うーん、どっちも。

ふーん。

くだらないことをだべりながら帰る一人、真夏の夜の日だった。

## ダブルフォース／決断（後書き）

頑張ります。まだまだ続きます。

## 戒さんと懸竜と包帯と眼帯

翌日、僕と光秀はゲンさんのお孫さんと公園で待ち合わせをしていた。

「ところで翔、次の場所はどこなんだ？」

ベンチに座りながら、網ごしのサッカーボールを蹴る光秀。朝、出发するときにも言ったのだが、懐中電灯はともかく、サッカーボールまで持つてくこともなかろうに。光秀いわく、意外に役に立つ時がある、だそうだ。

僕は地図を広げた。光秀が地図を覗きこむ。

「うへえ～、いっぱいあり過ぎてどこからいつたらいいかわからんねえな」

「そうだね、この前は近い無人島に行つたけど、この辺りにも太陽のマークがあるんだよね」

「ふむ、これは能力者でないと行けないところかな？」

僕と光秀は驚き、後ろを見た。ベンチの外側に僕と光秀の知らない第三者が地図を覗きこむようにして立っていた。

「ああ、これは失敬。僕は戒だべろっ！」

話の途中で光秀の網のとれたサッカーボールのシユートがその人の顔に炸裂していた。

僕はポカン、と口を開けてみていた。

……どうやら、高校生ぐらいに見えるこの人は、気絶してしまったらしい。

「光秀、なんで？」

「いや、手取り早く見分けようと思つて。能力者ならよけられるだろ、と思つたんだが、……。一般人だつたのかな？」

「いや、戒つて言つてたし。ゲンさんのお孫さんで間違いないと思うよ」

「マジで？」

取り合えず、呼びおひさしした。そして一人で土下座して謝つた。

「まったくもう、びっくりだよ。いきなり顔にシューートをきめられるとはね」

戒さんは起きて、記憶をとり戻してから、そう言つた。  
「で、能力者しかいけない道というのは?」

僕は話を反らしてそう聞いた。

「ああ、正確には能力者にしか見えない扉があつて、能力者がそれに触れると行ける場所、だね」

光秀が手を上げて、

「先生、質問」

「何かな、乱暴な光秀君」

どうやら、僕達のことはゲンさんに聞いてたらしい。

「それじゃあ、俺達はそこにはいけないんですか?」

「いや、能力者が随伴してれば、行けるよ。だけど、この地図じや、おおざつぱ過ぎて場所の特定は難しいなあ。そうだ、ちょっと、聞き込みしてきてよ」

話によると、その扉があるところでは必ず変なことが起こるらしい。  
「それには及びません、地元ですから。ここいらで、変なことと言つたら、やっぱり、あそこだよな」

「小学校のプール!」

僕と光秀は同時に言つた。僕達は小学校に向かいながら話していた。  
戒さんが、ちなみにそこでは何が起きるんだい?

と聞いてきたので、光秀が説明した。

これは清掃員が言つていた話なんすけどね、夜な夜な、プールの水位が一センチごとに上がつているそうです。

ふうん、可能性はあるね。そして、プール。

「あつた、僕についてきて」

戒さんはそう言つと、プールの飛び込み台から水面へと飛び込んだ。  
すると、水音もせずにあとかたもなく消えてしまった。僕と光秀も

それに続いた。いきなり目の前が真っ白になり光景がぐらぐらと揺れながら、一つの光景が構築された。

そこは、広大な世界。

かのように見えた。結構広い。見渡す限り草原だ。遠くに海のようなものも見える。

「ギャワーー。」

この世界が揺れるのではないかという程の大声。

前には光秀と戒さんがいたが、僕ではなく、その後ろにあるものを探えていた。僕は即座に後ろを見た。

「きょ、きょ、きょ、恐竜！？」

おどろくべきはそこではなかつた。

途端にそのティラノサウルスのような恐竜が破裂した。恐竜の血と肉片が飛び散る中、恐竜の後ろに見えたのは、背丈が、僕と変わらないぐらいの包帯巻きの男。

包帯を服代わりにしてんのか？と思えるぐらい巻いていて、流石に顔にはしていなかつたが、代わりに左目に眼帯がしてあつた。

まだひと恋恋と包帯と墨跡（後編めぐら）

まだだーまだ続やまく。

## 殺し屋デス

その同年代にしか見えない包帯眼帯男が聞いてきた。

「何者だ」

僕と光秀は突然の出来事にまたしても混乱していた。  
えーと、プールにダイブしたら、別の世界に来て後ろに恐竜が、と思つたら、その恐竜が破裂して、その後ろには包帯眼帯男が……。  
つて、なんじやそりやー。

「光秀君、翔君、しつかりしろ、奴は……殺し屋だ」

殺し屋は言つた。

「無駄な殺生はしない。私は殺し屋デス」

光秀がこそそと、僕に耳打ちした。

「すいぶん丁寧な殺し屋だな」

戒さんは真面目な顔してつつこんだ。

「違う。名前がデスだ。それよりも奴の指先には気をつける、右手の人差し指のほんの先っちょだ。それが奴の効果範囲だ」

僕は頭の中で整理した。

「つまり、殺し屋の右手の人差し指に触れると、破裂する、と言つことですか？」

「そうだ」

デスが名前だと聞いて笑つていた光秀の顔が凍りついた。僕はもう何がなんだかわからなくて恐怖感なんてとっくに麻痺してた。  
殺し屋は話を続ける。

「交渉しないか？お前らがあの劣聖石を諦める代わりに、お前らの命を助ける。どうだ、お得だろ？」

殺し屋の後ろには、あの、ウーのような岩、劣聖石があつた。僕は諦める気満々で、もちろん戒さんもそうだろ？と思つていたのだが、そうではなかつた。

戒さんは右手を銃のように構えると撃つ仕草をした。

「馬鹿を言つたな、こいつら一人には手に負えないレベルだが、俺は能力者だ。しかも遠距離のな。勝ち目がないのはお前の方だぞ、殺し屋デスよ。お前が殺し屋たる所以を俺は知つてゐる」

殺し屋はチツ、と舌打ちすると、

「今、私を殺しておかなかつたこと、後悔することになるぞ」と言い、すうっと消えた。

「はあゝ、ドキドキした」

光秀は手を胸にあてて、溜め息をついている。

「僕はそれ以上にわからなうことだらけで、思考停止状態だつたよ」

僕も溜め息をついた。

「わからないことがあつたら、今のうちに、じつぞ」

戒さんは片手を広げてそう言つた。

ひとつひとつ、聞いていこうと思つ。

まず、この世界は？

この世界は天使界と呼ばれるといひで、元は天使達が住んでいたところなんだ。  
さつき言つていた、能力者にだけ見える扉、異界の扉をくぐり抜けた先にそれはある。

そしてそこには必ず劣聖石とそれを守るモンスターがいるんだ。さつきの恐竜はそれだね。

恐竜が破裂したのは？

おいおい、そんなこともわからないのかい？それはデスの能力だよ。能力者なのに何でデスはここに？

能力を狙ってきたんだろうね。たぶん殺し屋だから主がいるんじゃないかな。

でも異界の扉はたくさんあるのに、デスがここにくる確率って？確かに確率で言えば、かなり低い。

……けどこれは迷信のよつたものだけど、力のある石の意思が人を引き寄せると聞いたことがある。

さつき戒さんが言つていた、デスの殺し屋たる所以と/orのは？

ああ、それはデスの能力の範囲は右手の人差し指のほんの先っちょだ。能力と能力は反発するのは知ってるね。

能力者同士が戦う場合、それを利用して相手の能力の侵食を防御するんだが、デスの場合、それができない。しかし、能力は破裂させるという強大なもの。

……つまり、対能力者には向いていない。暗殺向けなのさ。  
デスが消えたのは?  
入って来たところから出ただけだよ。一つの天使界につき、三つくらい入り口があるからね。

## 僕の、能力

「ありがとうございました。だいぶ整理がつきました」「今ので全部理解できたの？頭いいんだね、翔君。……そっちの乱暴な光秀君はわかつたのかな」

「……たぶん」

とか言いながら頭をひねっている。ぜってーわかつてないよ、こいつ。

「あ、先生、質問！」

「何かな、乱暴な光秀君」

「恐竜が破裂した時になつたこの血でべつとりの服、親にどう言い訳したらしいですか？」

「それは……あ、誰が能力者になるか決めようか。」

「能力者といえど、親を言いくるめる能力はないらしい。僕は親に絵の具を使う授業だった、とでも言おうかな。」

又はケチャップを使う料理を失敗したとしても……下手な言い訳だな。

どっちが能力者になるかは、結局ジャンケンで決め、僕が勝った。石に触ると、前回のように淡い緑色に僕の体が光つた。

「うん、これは……戻す力だ」

「翔、触つたもの全てを戻す、ってことはないよな

「わかんない。……、試しに触つてみる？」

僕が光秀に触るうつとすると、光秀は

「よ、よ、よ、よせ！」

と言つて逃げて言つた。ううん、冗談なのに。

「でも僕、たぶん、能力の制御ができる」

「ははは、まさか、翔君、訓練しないと……」

戒さんはそう言つていたが、僕は出来る気がした。

僕は精神を研ぎ澄ませ、ないものを瞬間に出すイメージを作つた。

すると、僕の手には三角形の盾が握られていた。大人が一人入れるぐらいのでかい盾だ。盾は重く、持ち上げることは出来なかつた。僕は身長が小さいので、すっぽり入る。盾の色は透明な薄緑色で、前にいる戒さんが盾を通り越して見える。

これが……能力。僕はただただ圧倒された。どういう風に戻るのか試してみたい衝動にも駆られたが、そこは押さえた。

これで、僕も薰さんや怜君のよつにかつによくなれるだろうか？

「翔君、すごい！」

戒さんはそう言つたが、僕は何がすごいのかわからない。

「え、え、何？」

光秀も、どしたの？といつ顔で僕と戒さんを交互に見ている。

天使界を出て、僕達はゲンさんの元に向かつていた。戒さんが言つには、一度、どういう能力なのがじいちゃんに見てもらつた方がいいよ。

とのことだった。その際に、初めから能力をコントロールできるなんて才能だねー、と言われ、さつきのすごいはそのことが、と初めて気がついた。光秀も驚いていた。

そんなにすごい事なんだろうか？

「ただいまー、おじいちゃん」

「おお、今帰つたのか、お帰り、戒よ。そして翔君達も一緒か、ちようどいい、美智子ちゃん、修行の成果を……あれ？」  
ゲンさんと級長は椅子に座つて話をしていたようだ。

「あら？今回、能力は手に入れられなかつたの？」

級長もリミットルームを使つたらしいが、僕が能力者だとわからないらしい。それはつまり、僕が能力を使つてないから。

戒さんは説明した。

「それがさあー、じいちゃん」

「なんと…初めから『ノントロール出来ると。若いのにたいしたもん  
じゃ』」

初めに『』で驚かれ、外で能力の範囲（盾）を出した時、さらに驚  
かれた。

つてか、能力のコントロールに歳は関係あるのか？  
ゲンさんに今までのこと話をした。

「ほお、殺し屋『テスに会つたか。……あやつ、未だに人を殺してお  
るのかの』」

何かありそうな感じだったが、聞くことは出来なかつた。

## 僕の、能力（後書き）

この小説のキャッチフレーズを考えていたのですが、忘れた頃にやつてくる、じゃ、ダメですかね。

そして、分かる能力で調べてもらつた。

「ふむ、翔君の能力は人や物を翔君が以前見たことがある状態に戻すことが出来る能力のようじや。でかい盾じやから動かすることは出来ん。出し入れが重要になるじやろう。盾は五ミリ四方の線で構成されておるようじやの。能力の戻す力や、その範囲、盾ということからして防御に向いておるようじや」

僕はお礼を言った。

そして、僕達は今日は各自の家に帰ることとなつた。

明日は、ゲンさんの提案で、能力を持つている僕と級長はゲンさんの元で修行や講習を受けることになり、光秀は怜君と、光秀が能力者になる為に天使界か、無人島の洞窟（前とは違うところだ。）に行くことになつた。

帰る前に、次は戒さんは参加してくれないんですか、と聞いたが、どうやら、大学受験で忙しいらしい。

戒さんは、

「大丈夫、君達なら、大丈夫」

と笑顔で言つてくれた。その言葉は僕に自信を与えた。

光秀が、

「明日はお前と一緒に行動出来ないのか、つーか、怜とかよーうへん、ジエラシー感じるな」  
級長にジエラシーつて……。まあ、この機会に怜君と仲良くなってくれるといいんだけど。

翌朝、僕は級長と小学校で待ち合わせし、一緒に、ゲンさんの元に向かつた。

「よく来たな」

ゲンさんの家をノックして入ると、ゲンさんはベッドで横になつていて上半身だけ身体を起こしていた。ベッド横のカーテンは開いてあつたので、今起きた訳じゃなさそうだ。

ゲンさんは、よつこいらせ、と身体を反らすと立ち上がりコーヒーを用意してくれた。「コーヒーを飲み終えると、ゲンさんの講習が始まつた。

「戦いの基本はリミットルーム、いいかな。では、リミットルームとは、何じやつたかな？　はい、美智子ちゃん」  
級長が手を挙げ、すぐに、はい、能力の範囲を見えるようにする技です。

と答えた。

「その通り。相手の能力や自分の能力の範囲が透明な薄緑色に見える技じや。この技は常時使えるようにしておく必要がある。その訓練は後でしよう。大丈夫、能力者なら、負担は物を見るのと同じくらいじや。次は長所と短所について」

外に出て翔君の能力を出して「ごらんといわれ、外に出た。盾を出すと、

「美智子ちゃん、空中に五角形をかけて翔君の盾に触れてみてくれんじやろか」

確かに、空中に五角形を描く、は級長の能力発動の鍵だつたはずだ。級長は言われた通りにした、すると、盾に級長の両手が触れた瞬間、バチっとその両手を弾いた。

「これが、能力の反発じや」

僕と級長はほおー、と感心していた。

「能力同士は相入れることがない。じゃが、例えば、美智子ちゃん、ハゲをイメージして翔君の頭を触つて『ごらん』

級長は恐る恐る、僕の頭を触れた。すると、頭がやけにすーすーする。……まさか。

「ここの通り、ハゲになる。じゃない、能力が効く。能力の範囲以外

の場所を能力で突けば、こうなるんぢゃよ」「  
寒いと思った。まだ、小六なのに。ひどいや、級長。級長は「めん、  
といいながら戻してくれた。

「見たところ翔君の盾は素早く出し入れできるよ」ぢゅ。「これなら、  
近接型の能力はほぼ、防げるぢゅう。これは長所」

「うん、昨日確かめたけど、出し入れは一秒もからないぐらいだ。  
「じやがな、相手が遠距離型の能力者の場合、弾を操作されて盾の  
ないところから撃たれたり、又は翔君の盾の合間、五ミリ以下の弾  
だった場合、モロにくらつてしまふ恐れがある。これが短所ぢゅ」「  
成るほど、僕の能力は近距離の防御に特化している、ということか。  
「講習、これでおしまいぢゅ。何か訊きたいことは?」

## 長所と短所（後書き）

関係ないですが、最近、散歩しています。ダイエットです。この散歩を小説に活かすにはーと毎日考えております。

はいっ。僕は手を挙げて、訊いてみた。

敵の能力者が能力を使つてない時に、能力者だと分かる方法はないんですか？

「いいとこつくる。一般人だと思つて先に攻撃されたらかなわんからな。……

それはじやな、この魔石を持つていきなさい」

いつの間にか、おじいさんの手には直径一センチぐらいの小さく丸い石が一つ、握られていた。

見た目、普通の石だ。

そのそれを僕達にくれた。

「これは魔石と言つて能力者が昔に作ったものらしい。これを持つていると、第

六感、つまり、勘が鋭くなる。一目で敵だと感じるのはじや」

僕と級長はお礼を言つた。

話によると、級長は能力の出し入れの他に、もうひとつ、ゲンさんに縛つても

らつたらしい。それは遠距離の攻撃が来たとき、オートで能力の封印をとき、敵

の弾を弾く、というもの。両手が能力の範囲の級長ならではの防御法だ。

ゲンさんが言うには一人で最強の防御陣だつて言つていた。級長を見るとなんだか、嬉しそうに見えた。

でも、級長ばかり縛つてもらつてずるいな。

「では、これからリミットルームを使えるようになる、実技を受けてもらいつ

級長は、「ひ

「私は昨日受けたから。それに宿題たまつてゐるのよねえ。じゃ、頑張つてね、翔

「

とこいつことをせりー、と言いつと帰つて行つてしまつた。

ゲンさんは修行用の天使界がある、といい、山の洞窟に入つて行く

と、天使界に

連れてこられた。

入るや否や、修行、スタートじや、と言ひて、ゲンさんは消えてしまつた。

……え？僕、ここに取り残された訳？

見渡す限り、一本道だ。両脇には高い壁があるが、模様といつたものではなく、

白一色で、どのくらい進んだのかもわからない。

発狂してしまつよ、マジで。

考えて見よう。

盾を出しても盾が見えるつことは、リミットルームは常時使えているつてこと

。

じゃあ、なぜ異界の扉は見えないんだろう。

もしや、もう見えてる？

いや、ないな。白い壁が異界の扉のはずが……。

えーい、出てこんかい！心中でそう想つと、本当に淡い緑色の扉がてきた

。外にでて、ゲンさんにどうしたことか理由を訊いた。

「目的は、リミットルームを使えるようにする」とではなく、意思

の力を試すも

のだつたといひことじゅ。」

ますますわからない。

「翔君はもともとリミットルームを使ってたぢゃないか。異界の扉の出口は能力

に似たようなもの。能力は心に左右される。とくに天使界ではの。心が強ければ、能力はそれに応じ、弱まれば、逆に能力も弱くなる。まあ、ということを感じて欲しかつたんじゅが……」

「そういうことだつたんですねか。僕はたまたま運が良かつたんだ。」

「運も実力の内といひし、まあ、合格じゅる」

と言つことで、僕は晴れてゲンさんから卒業、といひことになつた。

僕としては

ラッキーのうちに終わつちやたのはすゞく残念だけど、

「今までありがとうございました」

お礼を言つて、帰ることにした。

「また遊びにおいで」

ゲンさんのその一言が嬉しかつた。

光秀は能力を手に入れられただろうか？　いや、まず、生きているだろうか？

不安になり、帰り道も早足になつっていた。

帰るなり、光秀に電話した。

「光秀！」

「おお、翔か、どした？　息が荒いぜ」

「能力は手に入つたの？」

「モチ！」

話を聞くと、

冷君は始めからイラついていたらしい。そして、ケンカから始まって、天使界と

洞窟、どちらに行くか訊かれたから、簡単そうな天使界、と答えた。

ところが、1

人で怪しいところの聞き込みをやらされ、天使界のモンスターも自分でなんとかしろときた。

しづかあ。

モンスターは怜君によると、オークという種類らしい。猪顔で、棍棒を持つてい

る、あれだ。……が、三匹いたそ�だ。

「三匹もだぞ、信じられるか？　パワーは怪物だしよお」

「ううん、すごいね」

でも怜君は木刀すでにオーク一匹を倒していたらしい。能力も使つたのかな？

「あとはオーク一匹な訳だが、俺のショートが効かないのなんのつて」

こいつ、モンスターにサッカーボールで挑んでいたのか……。ある意味凄い奴かもしれない。

「そこで閃いたわけよ、能力だけとつてとんずらしてたらしい。能力について訊くと、

「ああ、飛ぶ能力だ。詳しく述べは明日、じいさん（ゲンさん）に訊きにいこうかと思つてる」

……飛ぶ能力。光秀、飛ぶのか。いいなあー。羨ましい。

そして、少し雑談してから電話をきつた。

辺りは暗く、僕は部屋の電気を消し、明日に備えることにした。

そして、明くる朝。光秀と級長と僕とで、ゲンさんのもとに向かつた。

「ふむ、光秀君の能力の範囲はサッカーボールのようじゃな。それ

と、両足。じ

やから、能力の反発を利用して蹴つてとばす」ことができる。当たつた相手や物を自由に飛ばす」ことができるようじゅうじや。一度に出せる球は四つ。じゃな

光秀は礼を言つた。

「サンキュー、じいさん」

そして、ゲンさんは光秀を修行の為、預かると言つた。

そして、ゲンさんはふと、訊いてきた。

「今更じゅうじやが、何故に翔君達は能力を使いこなしたりしたいのかな？」

「それは……」

僕は説明した。病氣の妹を救う為、神聖石が欲しいことを。その為には能力者になることが必要だと言われたこと等。

「成るほど、しかし、それは早く言いなさい。翔君はもう、妹を助けることがで

きる」

「え？」

どういうことだらう？

「何故なら、翔君の能力は以前見たものに戻す力だから。」

「あ」

「どうか、もう危険な目に会つ必要はないんだ。

妹を治せるんだ。

これで、終わるんだ。

いつの間にか僕の目には涙が流れていった。

「すぐに妹さんの元に行つてあげなさい」

「ありがとう、ゲンさん。級長、光秀、行こう！」

「ええ、行きましょう」

「なんだ、もう旅は終わりかよ。でも、ま、静ひりやんが治るのなら  
行くつきやな  
いな」

「ゲンさんにお礼を言い、僕達は早速、妹の元に向かった。  
「静つ！」

僕は急ぐあまり、勢いよく、病室の扉を開けてしまった。中に  
はベッドに寝て

いる静とその横で椅子に腰かけているおじいちゃんがいた。  
静は今は眠っているようだ。

「どうした？ 翔。いきなり来てびっくりしたぞ」「  
おじいちゃん、静を治すことが出来るんだ！  
「どうこうことなんじや？」

僕は事情を説明した。

「ほう、ならば早速。」

「うん」

僕は能力を使つた。

戻つてこい、元気な静。

すると、静がゆっくじ田をためし

た。

「……、お兄ちゃん？」

「静、どうか悪いところはないか？」

「そう言えば、苦しくない」

僕は自分のおでこを静のおでこへくつつけた。

「うん、熱もないな」

この後、医者が来て治つたことに驚いていた。天変地異の前触れ

れかー、とか言

つていたけど、失礼だな、僕の努力の結果なのに。

静は一週間安静にして、何もなかつたら、退院、といふことにな

なつた。その後

、しばらく静と話をしていたけど、気がつけば、級長と光秀はいなかつた。僕に

氣を使ってくれたのかもしない。

そして、家へと帰った。帰り道、じいちゃんが、「ところで翔や、言い訳にしていた夏休みの長期合宿についてじやがの、本当に

学校から長期合宿の紙が来ての」

「えーってことは」

「どうやら、ばれてしまったようじやの」

「えへ、親にどう言い訳すればいいのさ」

じいちゃんは無言だった。目は笑っていたが。じいちゃん、こんな時に言って欲しかった。

まだ、希望はある、と。

じゅかあ。（後書き）

すみません、とばしましたね。

## 滅んでしまった世界

そして、僕と同じくちやんは家に帰った。両親に「ひびくしかられたのは言つま

でもない。しかられた後の言葉が、これだ。

「勉強はともかく、宿題は済んだの？」

あ……。その後、親と宿題をする羽田に。

気づけば両腕を組んで机に寝ていたらしい。

はつ、宿題！と思つて見てみると、案の定、終わつてない。お父さんとお母さんは……。

お父さんは隣で寝ていた。僕はホツとして反対側の隣を見た。そこにはお母さんがいた。立つたまま。

「あ、お母や……」

目を疑つた。お母さんは目を開いて立つたまま、動いていない。父親を再び見る

。見たところ、父親は普通に見えるが、腹が動いてない。  
呼吸してない！？

お母さんもだ。え、え、ビーゆう事？　ビーしたらいいんだ  
ろう？　そうだ、

僕は以前見た物をもとに戻す能力者だった。盾を出す。そして、つい最近の明る

い家族をイメージ、そしてそれを現実に……、うわっ！

僕はまるで圧縮した空気が一気に開放されるような勢いで盾に弾き飛ばされた

。そのままタンスにぶつかり、氣を失つてしまつた。

「翔、起きろ、翔」

ん？ウーがしゃべってる。

「僕、ウーは嫌いだから」

そして再び目を閉じる。

ウーと何かが話している。

「はあ、どーする？」

「緊急事態なのよ、無理矢理にでも起こすわよ。翔、起きなさい！」

頬に衝撃が走った。と、同時に田が覚めた。

目の前には級長と光秀が。級長の手を見るどどっやらジンタされたらしい。

「翔、状況、わかってる？」

級長が心配そうに顔を覗きこむ。光秀は後ろで女つてこえへ、と言つてているのが聞こえた。

「え……と、そうだ、お父さんとお母さんが」

まわりを見ると両親は人形のように先程と変わらない姿でそこにいた。

「夢じゃなかつた」

僕は泣きそうになつた、が。

「翔、泣いてる暇はないぜ。お前の両親だけじゃない、俺や美智子の親もだ。そ

れだけじゃない、電気もつかない水道の蛇口から水もない、俺達も混乱してた

んだ。」

「俺が学校に行つたら美智子がいて、翔の家にも行つてみよつてことで来てみ

たらお前が倒れてたんだ」

「そだつたんだ。僕は確か、能力を使ってこのおかしな現象を元に戻そうとしたら盾に飛ばされたんだ」

「何でだ？ 何で飛ばされたんだろ？」「う

光秀は頭をひねっている。いきなり級長が両手を叩いて、

「わかつた。今、リミットルームで確かめたから間違いない」

え？ 何が？ と、光秀。

僕もリミットルームを使って見た。これは！ なんと、辺り一面薄緑色に輝いてい

た。お母さんやお父さん、机や椅子、宿題までも全てだ。僕はおずおずと、

「つまり、これは、能力者の仕業？」

「そう。そして翔が盾に飛ばされたのは、能力の反発と考えれば説明がつくでしょ？」

級長の把握能力にはいつも驚かされる。

光秀はあることに気づいたようだ、

「ちょっと待て。水もでないんだぞ。生きていけないし、トイレだつて臭くなるぞ。それまでにその能力者を倒すなんて俺たちだけで、ましてや死ぬ前に倒すなんて不可能だ」

僕にはある人を頼るしか出来ない。

「源さんに、会いにいこう。何か知っているかも知れない」

外に出ると、いつもと違い、街の中はシンと静まりかえっている。人はいるが

、僕ら以外の人は止まっている。八百屋のおじさんと話している僕の隣のおばちゃん、や公園で遊んでいる子供達、など。リミットルームを使いつ

全でが淡く輝いていて、昔やったゲームの滅んでしまった世界を彷彿させられる。

「これは……」

僕はめまいがした。こんな僕の住んでる世界じゃない、と言った

かつた。たが

、この世界はもう現実なのだ。

「もしかして、おっぱい揉み放題じゃね」

光秀がまたアホなことを言い出した。

後ろにいる級長がいつの間にか空中に五角形を描いている。

ゾクッ

と僕は悪寒が

した。

## 今後の話

「光秀えー？ そんなことして『じらんなさい』。あんたを嫌いなピーマンに変えてあげるわよ～」

暗い調子で言うのでせりに恐い。

「冗談だつて、いや、マジ、ピーマンは勘弁して」

級長は空中に三角形を描いた。その後、光秀が僕にひそひそ声で、「美智子をからかうのも命懸けだな」

僕は友人に忠告してやつた。死にたくなければ、大人しくしていることだね、と

。彼女の性格あんな能力手に入れたらどんな目に会うかわかる…

…はっ！ 僕

は殺氣を感じ、後ろを振り向くと、そこには空中に五角形を書いている級長が…

…。

「さあ、はりきつていこー」

さつきとはうつてかわって級長が明るい。

先程のストレスが光秀の髪をなくすというエネルギーに変換されたのではないか

と僕は思う。代わりに光秀が暗い顔をしている。

ちなみに僕は盾でガードした。

そうして源さんの家に着いた。道中、光秀と僕は謝つて、なんとか髪を元ど

りにしてもらつた。僕の能力でも戻せたが、もし戻したとしても、級長の心まで戻せないので、そこは諦めた。しかし、級長は無駄に能力を一回使つてしまつ

た訳だ。

扉をノックする。

「入りなさい」

中に入ると、はつめた空氣の中、テーブルについている、源さん、怜君がいた。

入ると源さんが待つとったよ、とお茶をだしてくれた。

「どうやら事態は深刻らしい」

一呼吸ついてから怜君が口を開いた。

「どういう状況なんですか？　これは？」

僕は「わざわと訊く。

「お前等は、どんな結論を出したんだ？」

怜君の質問に、光秀は、

「これは、能力者によつてされたものだ」と「どういが」と「どういが」

続いて級長が質問する。

「こんなこと、本当に、人が出来るんですか？……とこりより、規模はどれくら

いなのでしょう？」

源さんがほぼ絶望的な答えを口にした。

「全てじや」

「は？ちよこと待てよ、ジーさん、地球全てがこうなつてこるということか？」

光秀の疑問に怜君が答えた。

「地球だけじゃない、銀河系も含めて全てだ」

血の気が引く、とか青ざめる、とこうことを初めて実感したような気がした。

「全て、だつて？」

源さんは話しが続いた。

「うう考えると樂じや、我々は止められた時間の中にいる

僕達二人は顔を見合させた。そんなことが……。

「先程の美智子ちゃんの質問へのアンサーじゃが、答えは、わからぬいじゃ」

「え？ 源史朗さんの分かる、能力でもわからない、と？」

級長は質問する。

「能力の反発、を覚えているかな？ これはおそらく、能力者がやつたもの。だから能力の反発が適用される。やつても無駄じゃつた」

あ、と、級長。そういえば僕の時も盾に弾かれたつけ。

「だが、田星はついている。なぜなら、源爺の孫、戒は時を止める能力者だからだ。そして、奴は今、ここに来ていない。その時点で決まりだ」

怜君は冷静に言った。

源さんは少し疲れ気味に、

「そうかも知れん。だが、戒の能力は直径一センチの弾をそれも一発のみ打ち出せ、効果も十五秒その物体を止めるというもので、そ

んな強大な能力ではなかつたはずじゃ

「じゃあ、なぜ、奴は家にもここにもいない…」

源さんと怜くんが口ケンカしそうだったので、僕は止めに入つた。  
「まあまあ、でも当面の目標が決まりました。戒さんを探す、ですね」

みんなそこは賛同してくれた。光秀の食事やトイレはどうすんだ？

という質問

に対して源さんは食事は天使界からも取れるが、いざとなつたら、アレジや。自

給自足じや。トイレはいつの山の特訓用天使界に昔、循環用トイレをつけてもら

つたことがあつてな。あ、もちろん能力者じゃ。それを使うといい。



## 天使界再び

そして、話は終わり、僕と級長と怜君は戒さんをさがしに、光秀は源さんの元で特訓することとなつた。

怜君について行くこと一・五分。ただついて行くだけだが、それもちょっと苦しい。

先程から思つていた疑問を口にする。

「どこに行くのさ、怜君」「俺らの学校だ。お前ら、学校に別世界があるのは、……知つてるな」

「あ、うん。天使界だね」

「そうだ。アレは実は別の天使界へと情報が繋がつて  
いる、つまり、天使界には天使界のネットワークがあるんだ。  
天使界ネットワークはいたつてシンプル。必要な情報を検索すれば、  
その答えが返つてくる。膨大

な答えがな。絞る必要はあるが  
級長が割り込んできた。

「つまり、天使界内ならどこでも使えるインターネットってことかな？」

「まあ、そんなところだ」

早速、学校に行くと、サッカーをしている子供達が止まつてたり、  
教室で宿題を  
している子供達が止まつていた。もしかしたら、静も……。僕は病  
院の方を向き

、立ち止まつていた。

「どうした？ 置いてくぞ」

怜君に声をかけられ、後をついていく。

そしてプールに飛び込み、気がつくと、前と同じ空間、天使界にいた。

怜君は立ちながら空を見上げ、両手はパソコンのキーボードがそこにあるかのよ

うに指を動かしていた。僕にも出来るのかな、と手を動かしても全く反応なし。

コツがいるのかも。

「わかったぞ」

怜君がいうには、何かのキーワードがあれば、そこを目印にして天使界から目的

の天使界に行けるらしい。そして、今回のキーワードは戒 時を止める能力者 天

使界にいた形跡 その天使界 だ、そうだ。

怜君は空間に手を当てるごとに、空間が光り、その中へ溶けるように消えていった。

僕達もついていく。

すると、そこは砂漠だった。よく凝らして見ると大きな水溜まりに木が一本とい

うオアシスのような場所も見える。

でも、暑くない。そのことを怜君に聞いてみた。

「能力で作られたものには能力者は基本的に反映されない。時を止めた世界でも

俺達が止まつてないのは能力者だからだ。良くも悪くもな。ただし例外はある。

能力者が能力を纏つてる以外のところを能力で触れられれば、それは発動する。

それと逆はあるな。能力で作られたものに、能力は使える「つまり、ここ（天使界）でも能力は使えるということか。

「さて、と。逃げてなければこの辺りに奴はいるはずだが」と、その時、足元が急に地面に吸い込まれる。足元は丸くへこんで

いて、中心に

人の四倍はありそうな虫らしき姿が。

ありじごくだ！

必死で上に上がろうとするが、砂だからあがけばあがくほど下に落ちていく。

急に滑りが止まつた。氣づけばへこんでいる部分が石になつていた。  
そして、僕

や怜君、級長は手足と身体少しが石に埋まつてゐる状況だ。

「これは、何？」

僕は訊いた。

「ごめん、急だつたから  
どうやら、級長が三回目的能力を使つたらしい。

……しかしもうちょっとなんとかならないもんかね。これじゃあ、  
身動きできな  
いし。

「敵は劣聖石の守護者のようだな」

怜君は補足した。

と、その直後、石にした田形をさりと上回る田形で砂滑りが始まり、  
動けない上

にどん底に落ちていく行くといつ最悪の状況に。

どうすれば、あ、元の場所、元の状態に戻せば、僕は能力を使い、  
元の場所に三

人を戻した。……が、元来た場所がありじごくによつて砂滑りにな  
つてるわけで

、空中に放り出された三人は再び穴の中へ。石は抜け出せたけれど。

「お前は何がしたいんだ~」

怜君の悲鳴が聞こえてくる。

## 能力者VS能力者

「違う、そつちだけじゃない……だ」  
怜君が何か言つているがこいつはこいつで考えていて、聞いている場合じゃない。

級長がすでにあつじょうべに食われそうで、必死に

「砂！」

と連呼している。

えつと、砂とそつちだけじゃない、か。

そつか！

僕は能力使い、再び元の位置の空中に三人を戻し、砂も初め見た平らな状態に戻した。

そして三人で大きなため息をはくと、三人とも急いでダッシュした。100メートルほど走ると、やはり、元の場所は円形にへこんでいた。

「なんとか、助かった、ようだな」

怜君もびっくりしたのだろう。

「私も死ぬかと思った。」

うん、それは僕もだ。

一難去つた。と思うのも束の間、本当の悪夢が僕らを襲う。

感じでわかつた。敵が近づいて来ると、魔石の効果だろ。

それは、薰さんだつた。

その目はまるで野獣を彷彿させるほど、恐ろしい目をしていた。

「また会ったな、子供達よ」

「薰さ……」

僕は気軽に薫さんの元に駆けつけようとしたが、怜君に手で制止された。

「魔石が反応している。奴と何があつたか、知らないが、奴は、敵だ」

薫さんが口を開く。

「私はいまだかつてこれほどまでに激昂したことはない」

薫さんはぶつぶつ何か言っていた。

あの時に殺しておけば……と。

「早く世界を戻せ、さもないと、殺して能力を解くことになる」なぜ……あ！　　薫さんは時を止めた能力者を検索した結果、ここに出た。そして

僕らがいた。……完全に濡れ衣だ。

僕のリミットリームはすでに、

薫さんが右手から薄緑色のブレードを出しているのを捉えていた。

「薫さん、話を聞いて」

級長の声も聞こえてないのか、無言でこちらに向かって来る。

「問答無用！」

僕と級長は薫さんに睨まれて動けなかつた。動くと殺される気配すらした。僕ら

は時を止める能力者ではないとふんだのか、薫さんは怜君の方へ向かつて行った。

○  
　　薫さんはダッシュすると、いきなり右上から斜めにきりつけた。怜君は持つてきただ両木刀で左の木刀で弾き、右で突きを繰り出したが、後ろに避けられる。怜君の木刀を見ると、武器を能力で纏つてるように見えた。

　　次は薫さんの左から右へ横薙ぎの攻撃。怜君は両木刀一枚を右脇に縦に重ねて防

御したが、あまりの威力に五メートル程、吹き飛ばされてしまった。

体制を崩し

た怜君にすかさず薫さんの攻撃、

「奥義、大月」

すると、怜君の服の至るところが破けていた。両腕、両足、腹、数ヶ所等。

本来ならば、僕が盾でサポートしなきゃいけないのに。かなり、悔しい。

「次は本氣で当てるぞ」

「やめて！」

級長が叫んだ。薫さんは動搖したのか、一瞬動きが止まった。その隙に怜君の両

木刀による一撃が決まった。一撃目は力一杯打つただの木刀によるダメージ。

二撃目は能力を纏つた一撃。

どちらも左足を狙つた為、薫さんは、片膝をついた。

「ぐつ」

「やめて」

級長は動けないながらも叫ぶ。僕は級長以上に無力感を感じた。

怜君は両木刀を薫さんに向けると

「話を……きけ」

とだけ言った。

そして、事情を説明した。薫さんは、すまなかつた、早とちりしていたようだ、と

、又、謝罪と言つたらなんだが、子供達がピンチの時、助けにこよう、と言  
い、去つて行つた。

「ここには他にも能力者がくるかもしれない、といつ」と、僕達  
は一旦、源さん

の元へ帰つた。時計も止まつてるので疲れたら帰るを繰り返すし

かない。

ところで、と、怜君に何の能力者なの、と訊いたところ、ダメージを倍にする能

力だそうだ。かなり、強そう。それにしても、かつこいい。

## 能力者VS 能力者（後書き）

漫画と小説つてぜんぜん違いますよね。  
……違いますよね。  
いえ、それだけです。

## 追跡、戒さん

源さんと光秀に起つたことを全て話し、一休みした後、光秀の話を聞いた。

「リミットルームは習得したぜ。楽勝だった」

僕は麦茶を飲みながら一息つく。

「あの、特訓用天使界（無限回廊）だよね。真っ白い、一本道の」「そうそう。俺様のセンスが光る瞬間だつたな」

……」二つの場合、妄想力がすごいから、精神力もあるのかも知れない。恐ろしい奴だ。

源さんが言うには、弟子の中で一番、創造力がすごいらしい。能力の出し入れもすぐに出来るようになつたとか。まあ、少し悔しいのは否めない。

そして、今度は光秀も含めた四人で再び戒さんの情報を求めて、学校の天使界へ

。その後、僕は怜君に怜君の能力で疑問に思つていたことを訊いた。

「怜君、木刀に能力がついているように見えたんだけど」

「ああ、能力は武器に付加できる。ただし、能力の範囲、形は変わらないからな

」  
……つまり、僕の能力の形は盾だから、剣を武器にしても盾と重なる部分しか、  
能力を纏えない、と言つことか。意味ないじやん。

そして、天使界へ。

怜君は以前と同じく、天使界ネットワークにアクセスすると、情報を探し始めた

。光秀は、

「お？　俺にもできるかな」と言つと手元でまるでキーボードがあるかのように打ち始めた。すると、空に検索画面が……。

何故だー。僕は本気で頭を抱えてしまつた。

級長はまあまあ、得手不得手はあるから、とフオローブてくれた。

怜君が、何かにきづいたみたいだ。

「奴は天使界を転々としている。今いるのは……、そこか！」

と言つと怜君は光の扉を開き、その中へ入つて行つた。僕達も続く。

そこは霧の濃い世界だった。何も見えたものじゃない。能力者だから天使界で

だんだんと体が濡れてくる、といつことはないものの、六メートル先がぎりぎり見えるくらいだ。

「まいつたな、これでは何も見えない

怜君もお手上げらしい。

その時、僕は何かがいるのをぼんやりと見つけ、追つて行つた。

「待て、翔。単独行動は危ない」

光秀達が追つて來た。

「何か見つけたんだ。戒さんかもしれない」

近くまでいくと、大きな蟹、それも五メートルはある蟹だった。視界が蟹で埋まる。

る。

守護者か……。

「氣をつける！　攻撃してくるぞ」

怜君がそう言つた途端、右のハサミを大きくふり下ろしてきた。

直前までそこにいた、僕と怜君は両脇にそれぞれ避けた。

蟹は連續攻撃してくるかと思えば、霧の中に消えていた。警戒していると、鋭い

音ともに矢のような水が飛んできた。それは凄まじく速く、見えたかと思えば、す

でに光秀に当たろうとしていた。

……が、その時級長が素早く光秀の前に滑りこんで両手でその矢を弾いていた。

源さんにしてもらつた遠距離の攻撃をオートで弾くという縛りが、今発動したの

だろう。モンスターの能力（攻撃）も能力で防げるんだなあ。

「あ、ありがとう。美智子」

「いや、体が勝手に。と、いうより疲労感が凄まじいんですけど」級長が言つにはあと四回も防げば、身体が持たないと言つ。とか話している間に

、一回防いでいた。

猶予がない、と思った僕は、能力を使い、とりあえず見たときの場所に蟹を戻した。いきなり虚をつかれた蟹は一時的に動きが止まった。

僕は

「怜君！」

と叫ぶと、怜君は無理だ。と言つた。木刀が折れるし、能力を纏つても、奴にはもとよりダメージがない。 $2 \times 0 = 0$ だ。と言つていた。どうすれば……。

考へているうちに蟹は霧の中に消えようとしている。光秀は飛んだり飛ばしたり

出来る能力……か。

そうだ、重力を使えば。

「光秀、蟹を空に飛ばせ」

光秀はきょとんとした顔であ、ああ。と言つと、能力のボールを蟹にシュー<sup>ト</sup>した蟹は六メートル以上、上がつて、落ちてきた。かなりの振動で僕達も揺れたが、蟹には傷一つない。

## 追跡、戒わん（後書き）

みなさん、蟹はお好きですか？

筆者は嫌いです。

手強い……といつより食べづらしからです。

## 敵か味方か

級長が、

「光秀、あなたも一緒に空に飛んで、蟹を百メートルぐらい上空に飛ばして来て

よ」

なるほど、それなら。

光秀はよしきた、と。蟹とともに上空に上がって行った。そして、待つこと、40秒。先ほどの揺れとは比較にならない振動が。地震か？　と思つほどものだつた。

蟹を見ると至るところにひびが入つてゐる。

「怜君！」

今度こそ、怜君は能力を纏つた両木刀を使い、蟹を粉碎した。

その後、霧が嘘の様に晴れた。怜君が言つには霧は守護者の特性だつたらしい。

空はオーロラのようなものが輝いていて地面は滑るほどではないものの、凍つているようだ。他には何もなく、地平線が見える。この世界は今、夜のようだ。

怜君が天使界ネットワークで戒さんの場所を調べていると、僕達の後ろから足音

が。戒さんだつた。それと知らない一人。

「戒！」

怜君は叫んだ。

知らない二人のうち、赤髪で髪を真上に伸ばし、バンドを頭につけ

ている男が、

パチパチと拍手をしている。

「パチパチパチ、よくできました」

明らかに魔石が反応している。僕達は警戒していた。赤髪は、「ハツ、しつかし、こいつら使えるのかねえ、なあ、どう思う? 条」

もう一人の条と呼ばれた180センチはありそうな、白髪の青年は、「使えない、かな。戒の推薦だから、楽しみにしてたのに。正直、がっかりだよ

」

戒さんは

「悪い、条、晴美。見込み違いだつたようだ」

と言つと、右手で銃の構えをとり、左手で支える仕草をした。  
まさか、戒さん、僕達に攻撃する気?

「そして、悪い、怜、翔君、美智子ちゃん、そして、乱暴な光秀君。  
どうやら、

僕達は仲間にはなれないようだ。くらえ、アクアスプレッド!」

戒さんの攻撃速度は銃の速度と同じだと源さんは言つていた。しかし、外せばそ

この部位が15秒止まって、15秒たつまで攻撃は出来ないとも言つていた。

つまり、防御すれば、戒さんは少しの間、無効化できるわけだ。  
級長はさつき、疲れたと言つて弾を防ぐオートモードを解除してた  
から、つまり

、ここは僕が盾で防御するしかない!

と、思い、僕は瞬時に盾を出した。確か戒さんの弾は一センチだから、五ミリ四

方で構成されている僕の盾は戒さんの攻撃を防げるはずだ。

……はずなのだが、盾ごとに、にやりと笑う戒さんが見えた。

と、思えば、弾が盾に当たった瞬間、爆発がおき、その爆発は僕達四人を包んだ

。

気がつけば、動けなくなっていた。力は入るが、動けない。  
話が違う。一センチで一発ずつしか打てないはずじゃあ。

「フフ、不思議な顔をしてるね。ま、簡単なことかな。彼は秘靈石  
を手に入れた

。以前とは違うよ

条はそう言つと、じゃあ、僕はこれで。と溶けるようこの世界か  
ら消えて行つ

た。

「僕も、止める力の本気を見せつけたかっただけだから  
と、戒さんも消え、残つた晴美は、

「ハツ、俺は遊んでいくぜ」

と、動けるようになるまで15秒、外見とは裏腹に奴は律儀に待つ  
ていた。

そして、大声で、

「さあ、楽しもうぜ！」

怜君は両木刀を取り出すると、

「ふざけているのか？　この四人を相手に勝てるとも？」

「ハツ、蟹相手に四人でようやく勝てたような奴らに言われたくね  
えなあ。あれ

、一人でも抜けてたら、お前ら全滅だつたろ？」

確かに、そうだつたかもしれない。

「ハツ、それにな、ありじぐ戦。」

「いつから見ていたんだ？」

と、光秀。

「そこからさ。ありじぐ戦や蟹戦は俺らが仕組んだ。守護者なん  
て俺らがとつ

くに倒してた

「なつ……」

僕はそれ以上、言葉が続かなかつた。つまり、僕達の戦闘力を見る

ために？

「ハツ、まあ、お前らは弱い。仲間にする価値もない。だが、このままでやあ、戒がかわいそうだ、だから、だから、俺がはかつてやる」

## 敵か味方か（後書き）

最近一話から最後まで読んでくれている方がいます。  
筆者、何気に感動しております。  
こういう人達が励みになるんだなあ、とつづく  
最近であります。

晴美はそう言つと、まず光秀に向かつてダッシュして來た。奴の能力の範囲は、

固く握られた手の回り、ボクシンググローブのような形をしていた。しかし、間合いの詰め方が尋常じやなく速い。ボクシングをしていたかも知れない。あつという間に詰め寄り、

「ハツ、一人目、ふざーかつく（不合格）、0点」

光秀にアッパーを食らわしていた。殴られた途端に光秀は、空氣の入った風船か

ら空氣が抜けるように空に飛んでしまつてゐる。

「ハツ、俺の能力はつまり、暴走させる」

後ろからお助けーという光秀の声が聞こえる。

……、悪いしばらく飛んでいてくれ。

次に級長の元へ。

「二人目、ふざーかつく。まあ、女の顔を傷つける趣味はねえ。また、0点」

と級長の肩に軽くジャブをした。すると級長は地面を少し削つて、花に変えたり

、イチゴに変えたり、ジャムに変えたりと二回能力を使つと、ペタ

ンと地面に座

り込んだ。ハアハア言つてゐる。

今日は攻撃を防いだりもしているので、精神的にも体力的にも疲れたのだろう。

次に、僕の元へ。

僕は来る前から盾をだしていた。ので後ろに回りこむことはわかつ

ていた。予想

どうり、後ろに回つて來た。

僕は怜君、と叫ぶと怜君は僕の後ろにいる奴のそばに後ろから、両木刀による攻

撃を仕掛ける。その前に僕は奴から一撃をくらつていた。

「ハツ、連携はナイス、20点、だが、ふごーかつく」

と言つてはいる間に怜君に一撃入れていた。速すぎる。

怜君も奴にかすり傷を奴の腹に一発いれていた。ちなみに僕は盾が出来たり消えたりを繰り返していた。

「ハツ、どいつも、こいつもふごーかつく、まだまだだな」

怜君の様子を見ると、少しおかしい。他のみんなは暴走したのに、怜君だけ……

よく見ると、クロスしている木刀に濃い緑色の光が行ったり来たりしている。あ

れはもしさ、倍にする能力が、行つたり来たりしている? だとしたら……。

晴美は僕の方を見ながら、何か話している、そして、そう思つだろ? と後ろを

振り向いた瞬間、怜君は、たまつっていた力を爆発させ、奴めがけてクロスに両木刀をぶち当てた。

「加重カウンター!」

「ぐはつ!」

晴美はその場で倒れた。

「ありがとう、お前のおかげで前に進めた。両木刀をクロスさせ、力を行つたり

來たりさせることで、二倍ではなく、行き来で四倍また、行き来で十六倍となる

必殺技を得た」

晴美は片膝をついて右手を腹に当てるとい

「お前……、一体? ハツ、ククツ、ハツハツハ。成る程な、お前ぎりごーかつ

く。65点。面白い奴、一人いるじゃん。いいところに招待してやるよ。通神闇、

これがキーワードだ

といい、彼もまた、闇夜に消えて行つた。

僕達は、いつたん、源さんの元へ帰ることにした。そして、一通り話した後、

ぐつすり眠つた。

そして、源さんがテーブルに着くと、

「では、これからのことじやが、どうする?」

ミーティングが始まつた。怜君はバンッとテーブルを叩くと

「俺達がすべきことは三つある。まず、何だと思ひ?」

光秀が手を擧げた。

「はい、トンガリ」

と、怜君は光秀をあてた。光秀は怒るかと思ったが、意外に冷静だった。もう慣れてしまつたのかも知れない。

「戒を追つて、世界を元に戻すこと」

「まあ、間違ひではないが、それは最後だな」

じゃあ、はい。と級長。

「秘靈石の力を手に入れて彼らを倒せる力を得ること」

「まあ、それも間違ひではない。けど、それは一番田」

最後に僕が手を擧げた。

「情報を得ること。まだ何もわかつていないと思つ」

「くつ、どいつもこいつも」

怜君は堪忍袋のおが切れたのか、先程よりも強い力でテーブルを叩いた。

「まず、必殺技を会得することだらう」

## 必殺技（後書き）

怜はお気に入りのキャラです。よつて、強くしてしまいましたが、

そんな彼にも弱点が……。

他のキャラも強くしていく予定です。

乞うご期待！

なんぢやつて。

## 強くなる資格

一瞬、時間が止まつたかのよひに思えた。いや、確かに止まつているのだが。

源さんがやれやれ、といふと、

「ワシが優先順位をつける。確かに、孫は敵で、強くなつてゐるようじや。他に

敵がいるとも限らない。よつて、まず、特訓、次に秘靈石、最後に情報を集めがてら、孫を追う、ででどうじや？」

皆、賛成した。

しかし、必殺技つてどいつもつて会得するんだろ？

源さんは、ワシに任せとけ、それぞれにいい特訓場（天使界）がある、と言い、僕達は後について行つた。

「まず、ここ。オオイヌノフグリによく似た花じやが、小さいからと言つて侮ることなれ。特性がある。『えた攻撃』を三倍にして返す

、カウンターフラワーじや。ここにはたくさんある、怜、お前さんが使うといい

」

「わかった、源爺」

そして、移動する間、光秀が、ちなみにオオイヌノフグリつづーのは実は犬のき

○た○、に似ているからつけられた名前らしい。とウンチクを披露して、級長に

殴られていた。まあ、ピーマンにされるよりいいだろう。

そして、次の場所。

「これは戻り玉」

源さんは直径十センチの白いボールを取り出した。

「この玉は自分の形を記憶している。グーで殴つても、この通り」源さんがボールを殴るとボールにはグーの後がついたが、瞬時に、ボンッと元に戻つた。

「元に戻る。美智子ちゃんはこれで特訓するといい

「わかりました」

そして、次の場所へ。

「光秀君はここ」

光秀は源さんに詰め寄つた。

「おいおいおい、じーさんよ、ここのはじーさん家じゃん」

「飛ぶ、という特異な能力、どんなことができるのか、想像すると楽しいじゃろ

う？」　ワシは光秀君の想像力に賭ける

……それって、つまり。

「自分で考える、という」とか

光秀は期待が外れたのか、肩をがっくりと落とした。まあ、君の気持ち、わからなくもない。

そして、源さんは最後の場所へ移動しながら説明してくれた。

「ワシは翔君の能力はおそらく、進化する可能性があると思つている。盾に触れ

ていると以前見たものに戻せる能力にプラス、盾自体に付随している能力が何

かあると思うんじゃ

「え！？ それって、源さんみたいに？」

「ワシのとは微妙に違うが、翔君のはおまけみたいなものじゃね？」

だがおまけにしちゃあ、使えるおまけじゃな。そして、そのおまけの力を引き出すには、自

分の能力と話し合つことじやな

ん？僕が不思議そうに首をかしげていると、源さんは天使界の扉を開き、僕をそこに入るように促した。

そして、中に入ると真っ暗な世界にどこまでも続く一本の光の道があつた。

どこからか、声が聞こえてくる。

「わたしは守る能力をつかさどる天使。お前は力を得たいのか？」

「うん」

僕は力強くうなずいた。

「ではいくつかの質問に答えてもらおう。扉を進め」  
いきなり、光の扉が道中に出現した。僕はそれをぐぐる。  
またしても、真っ暗闇の世界。声が聞こえる。

「この娘は」

病院で寝ている静とその病室だ。その部分だけ、スポットライトが当たっている。

「病氣で死ぬはずだつた。神が定めた運命だ。それをお前がねじ曲げた。何故だ

？」

それは……。

「好きだから、家族だから、死んでほしくないからだ」  
僕は虚空に向かつて叫んだ。

「それは神を敵にしてもか？」

「当たり前だ！」

先程よりも強く、僕は叫ぶ。

「では、次だ。何故、力を求める？娘だけでよければ、時の縛りから解放してやら

ろ」

僕は一瞬悩んだが、悩むまでもなかつた。

「それは嫌だ！僕は、いや、僕達は、全ての人達を助ける」

「全てを助ける、と言つたな。私には見える、お前達に待ち受ける過酷な運命を。  
神が定めたもつ、残酷な未来が。ここでもつ、休まないか？お前  
はもう十分頑張つた。それでもまだ、戦う道を選ぶのか？」  
「僕は全ての人が幸せになれる道を選びたい。例え、お前が諦めろ  
と言つたって  
、僕が諦めない、それが戦う道なら、それを選ぶさ」

## 強くなる資格（後書き）

資格といえば筆者は運転免許ぐらいしか持っていないません。  
あれも、取るのにだいぶ苦労したのですが……。  
みなさんほどのくらいもつてますか？  
それと、評価や感想が欲しくなる今日このじかであつます。  
どしどし応募ください。  
なにがやつて。

完成、僕らの必殺技

「そうか、わかつた。お前はわがままだ。だが、その心に強い意志を秘めてると

見た。世界が救われるのか、それとも……。お前は神（運命）に勝てるのか、見届

けさせてもらおう。そして、今新たな力をお前に授けよう」

「技の名は因果応報。ガードした相手の技を吸収し、返すことがで

ある。また、

そして、またしても、光の扉が現れ、それをぐぐると、源さんの家の前だった。

卷之三

ああ……。光秀がうーらー、と飛んでいた。

何とかマンかお前は、と奴の額をきゅうけきにと、「あたぐな」と光秀は僕に気づくと、僕の元に降りてきた。

一光秀  
必殺技は?」

「うーん、高速で飛んで、能力を纏つた一撃でもいいかなって」

ジムジム・アーティスト

次に、級長のところに一人で向かうと、ちょうど、戻るところだつ

話しかけると、

「必殺技？」  
できたわよ。ドリームマジック。二十分以内なら、

「簡単に勝手に戻すことができる」  
なるほど。簡単そうで難しい必殺技だな。

最後に怜君の元へ。すでに完成しているかと思つていた怜君の必殺技はまだ、完

成していなかつた。

怜君に話しかけると、

「以前とは違うことが二つある。まず、あの時はすでに奴にかすり傷程度のダメ

ージを与えていたこと。次に暴走していたこと。最初から必殺技でダメージを与える方法がわからないのと、暴走させないと、力の行き来がかなり、ゆっくりだ

、ということだ。」

と、難点を話してくれた。十秒で八倍だそうだ。十分使えそうな気がしたので、

それはそれでいいんじゃない?と僕は言つたが、それなら四回、両木刀を当てた方がいいと言つ。

僕と怜君があーだ、こーだ話していると、光秀の、

「だつたら分ければ良いのか」

と言う声が聞こえてきた。光秀と級長の話は、光秀の髪が、単調過ぎるので、ど

ーにかしなさいよ、という話によるものだつたが、怜君は、

「閃いた、ナイス、トンガリ」

と言つと、立ち上がり、カウンターフラワーの前に立つた。両木刀を交差させて

力をため(行き来させ)、十秒たつた後、左手に能力を固定、右手で縦に勢いよく

、木刀をふりおろしたあと、左手の能力を纏つた一撃で、カウンターフラワーを見事に粉碎した。

僕達はあっけにとられていた。つまり、普通の木刀による打撃の後

に、能力を纏

つた一撃、と、役割を分けたわけだ。まあ、最初に能力を倍増させているけど。

「完成だ、加重カウンター。ほら、何、ボケーっとしてる、もう行くぞ」

そして、僕達は怜君について行き、源さんの家へ。

「ほお～、みな、必殺技が完成したわけか」というのでも、皆、各自必殺技を見せるこ

とに。見せた後に一人一人にアドバイスをくれた。

「美智子ちゃんは後は発想力の問題じゃな

「翔君は……、悪くない」

「光秀君は改良の余地あり、じやな

「怜は、その必殺技でいいのか」

怜君は問題ない、と言つとさつとビッグドに入つていった。僕達も

その後、寝ることにした。

そして、ミーティング。

「秘靈石についてじやが……」

と源さんはきりだし、意外な言葉を発した。

「手に入れなくてもいいんじゃなかろうか」

怜君は反発、

「何故だ、源爺」

「秘靈石はな、属性を付加するものや、コモリットブレイクを使えるよつにできる

ものがあるんじやが、どちらも上級者用のもの、お主らが使うと逆に弱くなる可

能性だつてある。いや、確実に弱くなる。今のお前達だつて充分強い。

大丈夫じ

や。戒を追つていきなさい」



## 完成、僕らの必殺技（後書き）

筆者も必殺技が欲しい今日このごろであります。ひじぐりぐりアタックとか、横に頭を回転させて相手にぶつける、ヘッドスクリュー、とか。

## 怜君の本気

源さんのその言葉で秘靈石よりもまず、戒さんの足どりを追つ」となった。

そして、僕達は例の「」とへ学校から天使界に入り、怜君が『通神閣』をキーワードに検索していると、

「ー、これは？」

怜君を見ると、眉をひそめていた。

「どうしたの、怜君」

と、僕が訊くと、

「俺宛てにメッセージが残されている。待て、今、読んでみる『ハツ、おせえ（遅い）、おせえおせえ。いつになつたら来るんだ？ ああ？ 待

たせんのが、上等かあ？ まあ、いい。通神閣を昇つてこい。五階で待つてる。

□  
「それだけか？」

光秀が訊くと、怜君は、

五秒ぐらいしてから、ああ。と答えた。

級長は、閣というからにはタワーをイメージするわね、と言つていた。

僕、階段昇りは得意じやないんだけどなあ。

怜君が突然、

「ただし」

と言い始めた。何の事かわからず、言葉の続きを待つていたが怜君はいきなり

、僕達に向かつて両木刀を構え始めた。

「お前らを全員倒す事が招待の条件だそうだ」  
そんな……。だったら、行かなきゃいいのに、怜君が何を考えているのかわから  
ない。

級長が、

「だつたら、行かなきゃいいだけでしょ?」  
と言つてくれた。

……が、怜君は、

「俺は奴らに興味がある、残念ながら、な。さあ、全員構えろ!」  
光秀はフツフツ、と笑つと、

「ちょうどいい。前からお前は気にくわないと思つてたんだ、今、  
ここで、倒し  
てやる」

そんな光秀は無視して、怜君は僕に向かつて、両木刀を振つてきた。  
左の木刀に  
能力がついている、とわかつていた僕はまず、右手の木刀による左  
上から斜めに  
くる攻撃をしゃがんできけ、次にきた左手の木刀による右上からく  
る攻撃は能力  
を纏つっていたので盾で、ガード、能力を吸収した。

怜君はチツ、と言つと、後方へステップを踏み、四メートル程下が  
つた。

チラツと級長を見ると、オロオロしているだけだ。そのよが見をして  
いる間に、

お前には打撃の方がいいようだな、と言い、怜君は間合いを詰めて、  
僕に打撃による一連撃をあてようとしていた。まづい、避けられない、と思つ

た瞬間、光秀  
が、うーらーら、無視すんじゃねー、と言い、ギリギリでジェット  
パンチを横顔

に当てた。光秀の飛ぶ能力を纏ったパンチで、二十五メートル程、

怜君は体制を

崩し、ふつ飛んだ。怜君は、

「なるほど、トンガリ、お前のはかなり、ふつ飛ぶ、だが、威力はない。必殺技

としては〇点だ」

僕はもう止めようよ、と言つたが、怜君は嘲笑、ここで止めてどーする、と言う

と、両木刀をクロスして……。まずい、加重力。ウンターだ！怜君、本気だ。

光秀が飛んで向かつて行き、ジェットパンチを正面からくらわそう

としたが、パ

ンチを能力を纏つた左手の木刀で払われると、光秀は大きく体勢を崩し、加重力

ウンターを背中にくらつてしまつた。光秀はそのまま地面に滑りこんで、倒れて

しまつた。今の怜君の左手（の木刀）は大きな力の塊、弾かれて当然か。しかし大

丈夫か、光秀。級長が光秀の元に向かつて行つた。そして、

「もう止めて！」

と叫んだ。

……が、怜君は

「安心しろ、倍率は四倍ぐらにしておいた。まあ、それでもトン

ガリは立てな

いだろうがな」

と言い、躊躇なく僕の元に向かつて來た。僕は盾を構えていたが、

怜君は打撃に

よる一連撃を繰り出した。あ……。怜君は物理と、非物理（能力）の両方の攻撃が

できるんだつた。気づいた時には、僕も腹に一連撃をくらつていた。

「かはつ」

かなりの痛みだ、光秀は本当に大丈夫だろうか？僕も動けなかつた、動きたくない

かつた、これ以上、痛みを伴いたくなつた、だから、気絶したふりをした。

「結局、こんなもんか」

そう言うと怜君の声はしなくなつた。代わりに級長の、大丈夫、大

丈夫？　とい

う声が聞こえてきた。

## 怜君の本気（後書き）

特別をつくると、それが特別でなくなってしまい、ところづけ話を聞いたことがあるでしょうか？

特別が普通になってしまふ、といつことですが、今、筆者は見事にそれにはまってしまいました。

ああ……今までやつたダイエットの成果が……。

## 光秀の考え方

僕は目を開いた。怜君はすでにいなく、何故か、級長は無事だった。級長の話を聞くと、僕を倒した後、そのまま、目的地へと向かつたらしい。

「あんな男だと思わなかつた！」

誰よりも級長は激怒していた。

光秀はボロボロで、いずれ個人的に奴を倒す、と言つていた。  
一人では立てないようで、級長の肩をかりて、よしやく歩ける程度のようだ。

僕はというと安心したような悲しいような、複雑な気持ちになつた。でも、よく考えると、今まで怜君に頼りっぱなしだったかも知れない。もっと強くなりたい。怜君を止めたり、他のみんなを守れるよう。そう、思つた。

いつたん、源さんの元へ帰るつゝと思つたその時、僕達の元に現れたのはなんと、晴美だった。

見たことない白いフードを被つた女の子を連れて。中学生ぐらいの年齢のようだ。

「ハツ、ザマアねえな。……しかし、女は傷ついてないつと。奴もまだまだ甘ちやんだな」

光秀はボロボロながらも口を開いた。

「何故だ。何故ここにいる、通神閣の五階で待つていてるんじやなかつたのか？」

「ハツ、誰が俺が待つていてる、言つたよ。待つていてるのは戒だ」「戒さんが！？」

僕は思わず、叫んでしまつた。

「別に驚くことでもないだろ？よ、あとな、俺が用があるのはお前らだ」

と言い、晴美は連れの女の子の、肩を叩いた。

女の子は、フードをさげ、

「初めまして、桐咲愛、と申します」

そして、その桐咲さんは僕の元に歩いて来て、能力の付加された右手で、僕に触

れようとした。とつさに盾を構えたが、桐咲さんの、

「抵抗しないで、大丈夫、悪いようにしないから」

という声の優しさに負け、盾を解いてしまった。

彼女が、僕の額に右手をあてる。すると、なんと、腹が痛くなくなつた。どうい

うことなか訊くと、回復する能力者なんだという。

彼女は光秀にも同じことをすると、

「じゃあ、私はこれで」

と言い、去つて行った。

晴美は、おじ、後でデートの約束、忘れるなよ、と言い、後にはセクハラです、

という言葉が残つた。

そして。

「じゃあ、用意はいいか？」  
と晴美は言つてきた。

僕は、

「何を、するつもりなんだ？」

「ハツ、決まつている、第一ラウンドの始まりだ」

晴美が指をパチンと鳴らすと、晴美の隣の空間が歪み、条が出てきた。

た。

「やあ、久しぶり。第二ラウンドの相手はこの僕、と言いたいところだけど、天

使界の魔物を連れてきたよ。ま、君達にとつてはちょっと厳しい相

手かな」

すると、またしても、条の隣の空間が歪み、モンスターが現れた。条は、

「ガーゴイル、一般的な悪魔の顔と角、翼を持つモンスター、石化できる」

と、補足説明すると、晴美ともども消えてしまった。

また、どこかで見てるに違いない。くつそ、ダメージは回復してもらつたが、精神的にきつい。

特に怜君がいない、という点で。

そして、晴美が僕達をオモチャにして遊んでる点でだ。  
僕は冷静になつて考えた。今まで怜君が決め手だったが、彼がない今、決め手は……。

光秀のジェットパンチはただ飛ばすだけだし、級長にモンスターを直に

能力の付加された手で触れてもうしかない！

と考えている間に、ガーゴイルが飛んで一直線に襲つてきた。  
爪による引っ搔き攻撃のようだ、僕の盾では防げない。  
避けようと思ったが、両となりには級長、光秀がいる。  
光秀はともかく、級長は避けられないかもしれない。  
どうしようか、と考えていると、光秀が、

「Jの戦い、俺に任せろ」

と、言い、飛ばす力の球を蹴り飛ばし、ガーゴイルに  
ぶち当てた。ガーゴイルは飛ばされて十メートル程後方に下がつた。  
そんなに言つなら光秀に任せよつ。何か、考えがあるようだ。

## 光秀の考え方（後書き）

筆者の最近のお勧めは断然、くんせいたまご、ですね。  
もともとくんせいされた物は好きなのですが、くんたまは別格です。  
食べる機会があればぜひ！  
……おやじか！

## 必殺、グラビティ・バウンド

光秀は何をするのかと思えば、何回も能力球をあてて、無駄にガーゴイルを飛ばしているだけだった。

……何も考えてなかつたな？

ガーゴイルはまたしても光秀に向かつて行く、光秀はまたしても、能力球を蹴り

飛ばす。……が、なんと、ガーゴイルは能力球を避けてしまった。そして、石化して向かつてきた。

見ていられない僕は盾を出し、ガーゴイルを光秀に飛ばされた位置にまで戻した。

ガーゴイルはキヨロキヨロ、辺りを見回している。

その間に、級長は光秀のところに行き、

「大丈夫？」

と声をかけた。何やら一人で話している。僕も駆けつけると、「それでいいの？」

「ああ、これで、ガーゴイルも倒せる、俺の必殺技も完成だと、話していた。

級長は空中に五角形を描くと地面を少し削り、鉄の靴へと変化させた。

光秀は右足にそれを履くと、飛んだ。重くないのか、と訊くと、鉄靴に

も飛ぶ能力を付加させているらしい。

……と、ガーゴイルが石化して再び向かつてきた。光秀は飛んで行き、ジェットパンチをあてた。キックじゃないのか？

そして、後方へと下がったガーゴイルはなんと、さつきはずした能

力球にあたり

、光秀の元へと、すごい勢いで戻ってきた。

……石化したままで。

光秀は横に一回転すると、ガーゴイルの頭めがけて右足の鉄靴をあて、見事に粉砕した。

……のだが、蹴つたとたん、石の破片が光秀に行くことはわかつていたので、ガーゴイル全てを、光秀が蹴つた後すぐに、光秀のはずした能力球のあつた位置にまで戻した。当の光秀は石が飛んだり消えたりして驚いていた。

光秀はこっちに来て、

「悪い、助かった」

と言った。僕は、ツメが甘いよ、と言い、級長は、

「全く無茶するわね」

ヒヤヒヤしたわ、と言つていた。

そして。

「必殺技の名前はもう決めたぜ」

僕は一応光秀に訊いてみた。

「何？」

「マッハキック」

うん、やつぱりセンスのかけらもないな。

級長は重力っぽいからグラビティ・キックにしたら、と言つていた。  
うーん、もうひと押しだな。

「グラビティ・バウンド」

後ろで声が聞こえた、と思つたら、晴美だつた。條も  
いて、ひたいに手をあててやれやれ、と言つている。  
どの面下げて戻ってきたんだ、全く。

「ハツ、こいつで決まりだる」

級長は、この人達の言つことに耳をかさない方がいいわよ、と言つたが、光秀は

「か、かつこいい

田をきらきらせながら言つのだつた。……どひやひ、決まつたよ

うだ。

条は、

「光秀君はまあまあ、だね。翔君のフォローも悪くないかな。ただ、

美智子ちや

んはね……、まあ、オマケつてことだ」

級長は何よ！ と、敵意むき出しじしていた。

晴美は、ハツ、と言つと、

「条は甘いな。まあ、リーダーがそう言つなら、お前  
らも招待してやるよ、行け、通神閣へ。そして真実を田の町たりに  
してこい」

級長が、何で名前や能力を知つているの！ と訊くと、晴美は一

言、戒に訊いた

、とだけ言つた。

僕はちよつと、待つて、と言つと、何でお前らは僕達をはかつてい  
るんだよ、と

聞き、晴美を殴ろうとした、が簡単に避けられ、晴美達は消えて行  
つた。

消える際に、

「行けばわかる、戒に訊けよ」

と聞こえた。

そして、これからどうする、といふ話になつて、光秀は怜を追あつ、  
と提案した

。級長は源さんに連絡した方がいいんじゃない、と言つた。僕は、  
「怜君を追あう！ もしかしたら、戒さんと戦闘になつてるかも知れ  
ないし、今じ

やないと、戒さんはいないような気がする」

光秀は天使界ネットワークに接続し、通神閣と、検索し、通神閣へ

。僕達はそれに入つて行つた。

の扉を開いた

## 必殺、グラビティ・バウンド（後書き）

最近急激に冷え込んできましたね。  
みなさん、風邪には十分気をつけて  
お過ごしください。

なんて、たまにはまじめなことも書く  
筆者でした。

ちなみに光秀の必殺技の名前は、友達に  
考えてもらいました。

筆者もネーミングセンスがないもので。

グラビティ・バウンド！

かつこいいですね。これからも光秀君  
には活躍していくて欲しいと思います。

そして、随時前書き更新中です。大体三話ごとに更新しています  
ので、  
よければ前書きも見ていくてください。

## 戒さんの想い

気づくと、僕達は小学校の体育館ぐらいありそうな、広い建物の中にいた。窓のような穴がいくつもあり、そこから光が差している。円形フロアの中心には人の四倍はりそな、猪が倒れていた。たぶん、天使界の守護者だろう。後ろには劣聖石があつた。

僕は

「怜君が倒したのかな？」

と、訊くと、光秀は、

「……だらうな」

と答えた。級長が、何か見つけたみたいで、壁をじっと見ている。「どうしたの？」

と僕が駆け寄ると、突然、級長は、

「人々は平和に暮らしていた」

と、話し始めた。よく見ると、壁に短く文字が彫られている。そのまますぐ近くに二

階へ続く螺旋階段があつた。

「二階にも何か書いてあるかもしない、行ってみましょ」

と級長がいい、僕達はついて行つた。

二階にも階段の近くに文字があり、

光秀が、

「突如、世界の均衡を崩すものが現れた」と、読んだ。

僕達は三階へ急ぐ。

「その者、魔王。世界を滅ぼす者なり。強大な力とともに、それは現る」

と、僕が読んだ。

四階へ。

「その呪われしものの名は」

この階はここまでしか彫られていなかつた。  
と、突如、

「うそだ！」

という声が上から聞こえた。僕達は急いで五階に行くと、怜君が  
「ウオオオオオ！」

と、両木刀を構えながら、戒さんに突進していた。戒さんは  
「アクアスプレッド！」

と、言い、銃の構えをしていた右手から、弾丸の「」とき速さで、能  
力弾を打ち出

した。怜君には当たらなかつたが、近くの地面にあたつたそれは爆  
発し、怜君を  
包みこんだ。

すると、怜君は止まつてしまつた。

「怜君！」

僕は叫んだ。戒さんは、

「無駄だよ、前と違い、時を止めたから。後十秒ぐらいはね」

光秀が何か言おうとしたが、戒さんは、

「おつと、こつちの要件を先に聞いてもらおうか。まず、選別した  
理由、それは

、魔王を倒す人数を絞るため。

弱い奴はいても足手まといになるだけだからね。

近々現れる魔王とは、人類のみならず、地球上の全ての生物を滅ぼ  
す存在とされ

ている、そう、未来に現れる絶望の象徴だ。

僕と条、そして、晴美は大学サークルの仲間でね、未来の天使界を見つけたんだ。

その天使界から未来に行くこともできた。そこは、絶望的だったよ。

あんな、未来にさせない為、ちょうどビ、一年前、僕はある、強大な力を見つけ、手に入れた。

神聖石と同等、もしくはそれ以上の力を。

その力を使い、ようやく現代の時を止めたってわけ。くしくも、魔王と似た力を使ってしまったが……。

でも時が止まるのも、もう終わる。

……とにかく、時間がないんだ、魔王を倒すのに協力してくれるね？」

怜君はいつの間にか、動けるようになつていて、「だからと言って、あんなことが出来るものかっ！」

と、叫んでいた。

「そうか、残念だ」

戒さんはその後、壁によりかかり、カハツ、と血を吐いた。

「僕が死ねば、時は戻る。後は、君達次第だ」

級長はキャー、と叫び、僕と光秀は戒さんの元へ向かつた。光秀は戒さんを背負

つて運ぼうとしたが、さすがに重いようだ。足取りが重い。僕も手伝おうとした

が、

「待ってくれ、今、救急車を」

「フフフ、時が止まつてゐるのに、どうやつて呼ぶ氣だい、乱暴な光

秀君

あ……。

死ぬ前に、と、戒さんは僕に能力を撃とうと構えたので、とつさに盾を出した。

「それでいい。翔君、美智子ちゃん、乱暴な光秀君、後は頼んだよ。秀君

僕じゃ、ダ

メだつた、救えなかつたんだ」

と言つと、能力を撃つた。僕の盾は放たれた能力を吸収した。

その後すぐに条と晴美が現れた。条はしんみりした声で、僕は覗く

能力者なんだ、

今まで、君達の情報を盗み見てた、悪かつたね。と言った。

戒さんは僕の必殺技を知っていたから、今撃つたのかもしれない。

そして、晴美は

「ハツ、笑えねえなあ、笑えねえ」

といいながら泣いていた。条もまた、悲しそうな顔をして、

「彼は返してもううよ。愛なら、治せる……とまでいかなくとも、痛みをやわら

げることはあるから」

と言つと、光秀の背負っていた戒さんを背負い直した。

僕は、彼らが去る前に、

「どうしてこうなつたの？」

と訊くと、晴美が、

「全ての時を止めた代償は安くなかつたつてこつた。それだけ戒は

お前らに賭け

ていた、賭けていたんだ」と言い、去つて行つた。

## 戒ちゃんの想い（後書き）

戒のことはだいぶ悩みました。  
本当にこれでいいのだらつか？  
と。

作中のキャラを殺すところと筆者も悲しく  
なつながら書いた今回の話でした。

## 決意を胸に

彼らが去つた後、僕達も一旦、源さんの元に戻ることにした。怜君が僕達を裏切つてまでして得た情報を聞き出さないと、ね。それに、戒さんが命を賭けて倒そ

うとした魔王って？

そして、僕達に魔王を倒せつてことなのかな？

みんな、それぞれの想いがあるらしく、帰りは誰も話さうとはしなかつた。あの

、光秀さん。

源さんに今までのこと話をした。

「孫が……。そうか」

と、下を向いていたが、顔を上げ、

「翔君達には、ぜひとも戒の意志を継いで欲しい。人とそれに携わる全ての生物

の命がかかっている。お願い、できるかな？」

僕はノー、とは言えず、はい！ と頷いた。

光秀も、俺に任せろってんだ、と言い、

級長は、あまりノリ氣ではなかつたが、私に出来ることなら、します。と、言つていた。

怜君は、顔を横に向けると、馬鹿げてる、といい、布団の上に寝てしまつた。

仕方なく、僕達も寝ることにした。

起きた時、怜君はあの時何を話したのか、話してくれた。魔王は三日後、十年

後の未来からやつてくる」と。

魔王も能力者で、世界を滅ぼす程の力を持つてゐるということ。世界の時を止めたのはより、多くの強い能力者を集めるため、だそ

うだ。

そして、集めた仲間は僕達の他に一人、いのうしい。条と晴美、愛さんを除いて。

いろいろ、話している間に条と晴美がやつてきた。

「戒は……逝つたよ」

と、晴美は悲しげな様子で大学時代の戒さんの話をしてくれた。条も、

「戒が、これ、おじいさんについて」

と言い、腕時計と、手紙を源さんに手渡した。

「お、お、お」

と源さんは泣きながら手紙を読んでいた。

僕が、一人にさせてあげよう、といい、時も戻つたし、一日、解散、ということになつた。

時間は七時、暗くなつていた。家に帰ると、両親に宿題ぬけ出しながらやつてた

！と怒られた。忘れてたよ、本当に。えーい、時よ、止まれ、と思つたが、止まるはすもなく、時は刻々と過ぎていつた。

そして、源さんが、三日間は休みなさい、たまには静養も必要じゃ、といつので

、魔王がくるまでの間、休むことにした。三日後、学校生活を楽しんで少しした

頃に、あるニュースが流れた。

「緊急速報です。現在、地球に向かつて、いまだかつてない大きさの隕石が落ちてくるとの、連絡をつけました。隕石は複数あり、地球全土を包み

てくるとの、連絡をつけました。隕石は複数あり、地球全土を包み

ムルヒー

です。落ちてくる日は後日、詳細をおつて連絡いたします。あ、今、

スバコ

ンジニアターによる計算が終わつたようです。え……、なんと、今

田中正

間 従 に 境 現 の 生 物 三 本 立 に 緑 色 の 間 有 二 本 一 本 が 横 横

▪▪▪

僕は突然と、ニースを見ていると、級長が家にきた。

二二一ズ 見た！？

「僕はうん、今、見ていたところ、と答えた。級長は、これが魔王の

…… とんでもない奴ね。と、言つていた。とりあえず、みんな

とく流す難

精美がすで二

来ていた。

源さんか

「予期していた」とか起つてしまつた。悪しからぬ事だ。わしは持病でこのを離れられ

ない。みな、後はよろしく頼む！孫の手紙によると、場所は宇宙。

の力を持つて宇宙を天使界化してやる。天使界から入れるはずじゃ

晴美が、

ハ、と云ふ乗やがてたなを(まに)て倒してやめせ」

「どちらにせよ、おまえの限界はもう二つある」

と言い、光秀は、

〔六〕 俺がいたいと廣二は任せないんだよ」と  
とい、条は、

「僕は、遠くから観戦させてもらひつよ、愛と一緒にいるから、疲れ

たら、僕がワ

ープして、回復してあげるから。あ、僕は覗いたところにワープも

できるんだ。

……ちなみに、残りの強力な二人だけど、遅れてくるみたいだ。」

怜君は終始黙つたままだった。

僕は、ごめん、思いつかないや。と言い、みんなは笑っていた。

みんながはりきって、外に出ていった後、怜君と源さんはまだ家の  
中に残つてい

た。

## 決意を胸に（後書き）

筆者、パソコンのあるアパートをしたいのですが、今のノートパソ  
コンじゃ

増設やグレードアップしても、できないらしいのです。

あ～、新しく買おつかな？でもまだお金が……金欠の筆者でした。

次回、波乱の予感、お楽しみに！

## 波乱の予感

怜君は、

「あなたの考えていいることはわかつていいが、源爺。翔を殺すつも  
りだらつ！」

そうはさせぬかっ！と叫び、僕の前に立ち、源さんに向かって両木  
刀を構えた。

え？ え？ どうこうこと？

源さんは、フツフツフ、と笑うと、

「殺しはせん、法に触れるからな。だが、それに相応する」とは受  
けでもらひ。

気づいてしまつたのなら、仕方ない。怜、お前にも受けで貰ひやぞ」

源さんの口は本氣だつた。何が、どうなつて？

源さんは、能力を発動、気づいた時には、

「奥義、時縛り」

とこゝ声とともに、目の前が暗くなつた。

目を開いた時、家はなかつた。それどころか山もだいぶ潰れ、  
山と呼べるのか

どうかも疑わしい。どこを見ても荒れ地で、木なんか一本もない。  
地面はひびが

入つているところが多数あり、もう少しで砂漠になるんじやないか、  
と思わせら

れる。変わつてないのは空だけだ。

何故、こんなところに僕がいるのかわからない。しばらく、ボケー  
っと、空を見

ていると、源さん、「何かされたのを思い出した。

その影響でこうなつたのだろうか？

怜君も源さんの攻撃を食らつたはずだが？

と、辺りを見回しても、怜君はいなかつた。

仕方なく、歩きながら考ることにする。

まず、いつ、どこの「の」は大事だ、と思ったが、この世界、人の気配が全く

ない。家すらないのだ。当然かもしれない。

僕は、いつかもどこかもわからないところでのたれ死ぬのか……。

おじいちゃん

、しづかあ。急に家族が恋しくなつた。

しかし、怜君はどうなつたのだろうか？

僕が生きてるつてことは怜君も生きていたに違いない、と思つ。じ

やあ、何故い  
ないのか？

考えられるのは、怜君は違う世界に行つた、とか、おんなじ世界だけど、目覚め

る時間帯が違つた、とか……しか思いつかないな。

どちらにせよ、絶望的だ。なぜ源さんは僕を殺そうとしたんだろう？ 次から次へと疑問が浮かぶ。

いろいろ考えているうちに、遠くに薄緑色のものが見えた。  
あれは！

近寄つてみると、天使界への扉、異界の扉だつた。

ここは、地球なのか？ と、思い、とりあえず、扉の中に入つてみることにした

。中に入ると、なんと、太古の植物が生い茂つていて、家がたくさんあつた。

どうやら、集落みたいだ。集落の真ん中にでかい恐竜の骨らしきものがある。

周りで子供達が遊んでいる。付き添いの大人の女性がいたので、いろいろ訊いて

みようと、あの～、と話しかけたが、その女性は、

「え……」

と言つと、その後、女性は驚くべき言葉を口にした。

「翔？」

……、髪はロングだけど、あの顔立ち、まさか、級長？

「待つてたわ」

女性は何事もなかつたかのように、そう言つた。僕は、何がなんだかわからない

がとりあえず、わかっていることを説明した。

「そう。実は紺城君にすでに事情は聞いているの」

「怜君に！？」

級長は、説明してくれた。ここは僕からすれば未来の天使界だとうこと。

この天使界は僕達の小学校のあの、天使界だということ。

魔王によって、地球は滅ぼされたが、一部の能力者によつて、一部の人は各地の

天使界に住んでいるということ。

僕は、一番重要なことを聞いた。

「つて、ことは、みんなは？」

「そう、察しの通り、戦いに敗れ、死んだわ、みんな」

……。

級長の話は続く。

怜君は僕より先にここに来て、級長の話を聞き、力を求めて秘靈石の洞窟へ入つて行つたということ。

「私は彼に伝えたわ。この時代から出るにはこの時代の神聖石を手に入れるしかないってね。後、彼からの伝言、秘靈石の力を手に入れたお前を、神聖石の眠る

地で待つてる、ということらしいわ」

「級長」

「ねえ、美智子さんつて言つてくれない？私、もう大人だし、級長

でないし」

「美智子さん、僕、頑張るよ」

その後、美智子さんに勾玉のよつたなネットクレスをもらひ、それをつけてもらつた。

なにやら運命をかえる力を持つ口ひりしい。

かつこいいかな？ へへつ。

僕は美智子さんに怜君とは別の秘靈石の洞窟への扉（異界の扉）を開いてもらい、この地を後にした。ありがとひ、と美智子さんに言い残して。この天使界を出る間際に、

「頑張つて。ゆつてであり、まゝでもある～あなたには無限の可能性～あるから

途中、よく聞きとれなかつたが、気にすることもなかつた。

## 波乱の予感（後書き）

クライマックスと見せかけて、まだ続く、みたいな、よくありがちな手ですね。

筆者、してやつたり、と、こやついてあります。

まだもう少し続きます。最後までお付き合い、なにかがよろしくお願いします。

## 真実、そして僕は

中に入り、階段を下るとひとつつの部屋だった。500ヘイホウメトルはあるだろ？

か。階段はない。光源は何かはわからないが、部屋は白い光が照らされているよ

うな感じだった。

……何もない。周囲は「ゴツゴツした岩ばかりだ。

とりあえず中心に行くと、頭の中にお「そかん声が聞こえてきた。何者だ？」

「今河翔、と言います。秘靈石の力を手に入れる為に来ました」  
帰れ。お前には力を与えられない。

「お願いします。魔王を倒す為に必要なんだ！」

魔王を倒す？ そうか、回りの奴は教えてくれなかつたのだな。  
「え？」

魔王は、お前だ。

「え？ うそをつくな、僕は僕の世界を壊したりしない！」

未来のお前、という表現が正しいか。未来のお前は、とあることから人類に復讐

を覚え、悪魔の石の中でも最上級の、邪影石を使い、未来の技術や能力者に簡単には勝てない、とふんだお前は過去を滅ぼすことで、未来を変えることに決めた

のだ。思い出せ、友人等の様子がおかしくはなかつたか？

「あ……」

そういうえば、通神閣の五階に書いてある、魔王の名前、見るのを忘れていた。怜

君はあそこから、様子がおかしかつた。源さんは戒さんの手紙を読んでから、僕

を殺そうと思った？

戒さんや、他のみんなを殺したのは、僕だった？

自然に、涙が流れていった。僕は、

「それでも僕は、僕を倒す。僕がしたことは、僕がケリをつける」と、大泣きして鼻水をティッシュで拭いながら、言った。

倒したと、してもだ。大人になつたお前は過去を必ず襲うだろ？ その時、今のお前に倒されるのだぞ。

「それでもかまわない！ 仲間が死ぬよりましだ！ そして、怜君を止められな

かつた時のような無力感はもうたくさんだ！」

そうか、しかし……ん？ その勾玉、特性がついているな。真意は……変化、か

。うむ、試してみる価値はある。

「え？」

ならば、力で示せ。力なきものは結局、想いを達成できん。いきなり、ドーンと言づ音とともに、ドラゴンが現れた。四本足で炎をはいて、

翼がある巨大な爬虫類型モンスターであり、ゲームで大人気のあれだ。ちょうど

、でかいドラゴンの真下にいた僕はこのままじや、踏み潰される、と思い、端へと走った。

端に行くとわかるのだが、この部屋、ドラゴンが一回りでき、なおかつ人が

一人入れるスペースしかない。つまり、狭いのだ。部屋が狭いのか、

ゴンがでかいのかは……いや、ドラゴンがでかいんだな。

ドラゴンは耳の鼓膜が破れる程の咆哮をした。

僕は両手で耳をふさいだ。びりびりと感じたドラゴンの威圧。勝てるのだろうか

?いや、勝たなきやいけない。

ドラゴンはまず、炎のプレス攻撃。首を大きくしならせての一撃は圧巻の一言に

つきる。もちろん、盾でガード、吸収したが、ドラゴンかっこいい。僕はワクワ

クしていた。カメラがあつたら、夢中で撮っていたかもしれない。プレスが利かないと思ったのか、ドラゴンは爪での引っ掻き攻撃に変更してきた

。これは盾で防げないので、夢中で右に左に転げ回った。引っ掻かれた後の岩を見て、ゾーっとした。見事にえぐりとられている。

くらつたら、まず死ぬ。

しかし、動作が遅いので、くらつことはない。

ドラゴンはこれも無駄だとわかったのか、尻尾を振り始めた。何をするのか、と

思っていたら、尻尾を振り回すテイルアタックだつ、と気づいた時にはすでに目

の前に尻尾がきており、尻尾の端が足にあたり、勢いよく岩に叩きつけられた。

「ぐはっ」

朝に食べたものをリバースしそうになつた。

スピードの速いテイルアタックだと思ったが、尻尾の端、といつこと

と

、部屋が狭い為、尻尾が壁にあたりながらの攻撃、といつことで、まだ、何とか

大丈夫のようだ。激痛はするが、もう、弱音は言つてられない、僕は強くなるんだ！

真実、そして僕は（後書き）

ドリームコンピューター、もう少しで筆者待っていたゲームの発売です。  
いやー楽しみですね。  
楽しみです。

## コミットフレイク

しかし、どうやって倒そう？　今、僕にある力は、見たものを元に戻す力。そして、盾でガードした能力を吸収する力。

吸収した能力を二つまでストックする力。

そして、今ストックしている二つの力は、倍にする力と止める力。これらの方でどうやってドラゴンに勝つか……無理だー。

まず、僕は止める力を指先から弾丸のように、打ち出し、ドラゴンの時を止めた。

十五秒、考える時間を得た。

アクアスプレッド、と、口に出して言ったが、実際に出たのは、能力弾

一発で爆発もしなかつた。ちょっと恥ずかしい。吸収し、ストックした能力は少し、劣化するらしい。どうするか。

怜君の倍にする力を出してみた。木刀一本分の能力刀だつた。盾と木刀や盾と弾

は同時には使えないようだ。

じゃあ、能力刀と能力弾は？

結果、出来なかつた。

両方出すことはできたが、能力弾を発射すると、能力刀が消え、能力刀を壁に当てるごとに、能力弾が出なかつた。一度に一つの能力しか使えないらしい。

なら、能力を合体して一つの力として使えば？

僕は右手の能力刀と左手の能力弾の力を練り合わせ、合成するイメージを創つた

。すると、両手には日本刀のような、長い能力刀が握られていた。

新しい能力の発現だった。ドラゴンの時も動き出し、尻尾を振っている。

テイルアタックだとわかつてていた僕はドラゴンの真下に潜り込み、能力刀を突き

刺した。

……が、何も起こらない。どうこと？

僕はすぐさま端へと走るとドラゴンは爪で引っ搔き攻撃をしてきた。攻撃を避けてからからドラゴンをみると、明らかに先ほどより、しわが入つてい

る。

? どういう能力だつたんだ?

その後、ドラゴンは弱々しく咆哮すると、倒れ、十秒もすると、骨だけになつた

。

つまり、時を止める + 倍にする = 時を急激に加速するだつたのか。能力刀はドラゴンに刺しつぱなしだつたから、倍にする能力がどんどん進んで、

こうなつたのか。我ながら恐ろしい能力だ。

だけど、やつたぞ。一人で。僕はガツツポーズを決めた。

その後、どこからか、またしても声が聞こえた。

よくやつた、光と闇を心に持つものよ、私は、神の意志を継ぐもの。

今ここにそ

なたに新たな力を授けよう。

と、聞こえると、中心に四角い光る台座が出現し、僕はそれに触れた。

すると、僕の体が薄緑色に光り、新たな力を手に入れた。

声は言った。

そなたに少し説明しよう。上位の能力には属性がつく。火は水に強く、水は木に

強く、木は土に強く、土は火に強い。この通り、四属性があり、火、

水、木、土

はそれぞれ、侵食（だんだん強くなる）、広域（広がる）、増殖（  
増える）、封印（弱め  
る、無効化）の真意がある。先の能力の合体したあれば、火の属性  
になる。そして

、今、手に入れた力、リミットブレイクは土の属性。  
名をリバウンド・ゼロ、といつ。

反復させない、つまり、一度戻したことでもう、一度と起こせな  
い技だ

。基本的にリミットブレイクは一日一回しか使えない。よく考え  
て使う時を選  
ぶのだな。

「源さんに、秘靈石はリミットブレイクか属性かどっちかって聞い  
たんだけど」  
そなたの場合、コミットブレイクだったといつだけだ。そして、リ  
ミットブレイ

クは上位能力、つまり属性がつく、それだけのことだ。質問は以上  
か？ さらば

だ、光と闇の力を持つものよ。

と聞こえると、光に包まれ、気づくと、美智子さんがいた天使界に  
戻っていた。

あの集落へと行くと、美智子さんが待っていた。

「おかえり」  
「ただいま」  
少し、話をした。

「そう。あの時地球を襲つて来たのは、未来のあなただったの。な  
すすべもなく

やられたわ」

「そうだつたんだ」

「あなたを倒せるのは、あなたしかいないと思つてる。頑張つてね」

そして、怜君は先に神聖石の眠る地へ向かつたという。僕も休む間もなく、美智子さんに異界の扉を開いてもらい、その地に向かうのだった。

## コラム「フレイク（後書き）」

最近、有名な小説やマンガを読んでいますが、同じ、人、という人種が書いていないんじゃないかなって程の完成度にびっくりします。やっぱり、経験や知識の絶対量が少ないと、ああはいかないと思います。

筆者があの域に達するには……。  
何十年かかるのかなあ。

## 決意を胸に・真

異界の扉をぐぐり抜けると、そこは、洞窟の中みたいで何かの結晶がところどこにある、とても神秘的な場所だった。怜君が一番奥でたたずんでいた。

「怜君！」

僕が呼びかけると、怜君は前を向いたままで、「はめられた」

と言い、続けて、前を見てみる、翔。と、言った。

僕が前を見ると、巨大な石があつた。五角すいに五角柱をしたような石が五本

、横に並列され、大きさは真ん中が一番高く、横にいくにしたがつて小さくなつていた。

「これが……」

「そう、神聖石だ」

怜君は、だがな、と続けて「力を失っているんだ」「え？」

良く考えてみろ、と怜君。何故、俺達の時代で神聖石は誰も手に入れられなかつたのかを。何故、伝説とそれでいたのかを。それは、情報が、全くなかつたから

だ。天使界で検索しても、反応すらしない。

あの女（美智子さん）は、この場所を知つていて、俺達をここに導いた。つまり、

誰かが神聖石の力を手にした後だつたんだ。

「え……」

僕は言葉が続かなかつた。なんて言えばいいんだろう？このまま末

来て過ごして

いくしかないのか？

「その通りよ」

後ろで声が聞こえたと思つたら、美智子さんだつた。怜君は、

「どういうつもりだ！」

と、つっかかつた。

美智子さんは冷静に

「どうこうつもりでもないわ。この時代に、戒さんが来たことがあつてね」

「え？」

そう言えば、戒さん、そんなことを言つてたつけ。

「この箱を過去からくるかもしねない、勇者について。この場所でないとダメなよ

うに縛つてあるみたい。源史郎さんも一枚かんでいるかもね」

怜君はチツ、そういうことか、あのじじい、悪態をついていたが、僕には良くわからない。

美智子さんは、私にはどうやっても何も起こりなかつた、と言つていた。

しかし、箱を触つても何も起こりない。

美智子さんは、

「戒さんから何か、残されたものはない？」

「何も……」

怜君がもしかしたら、と言つた時、僕も思い出した。時を止める能力、これしかない。

そう思い、一応、怜君の手をとつて、箱に能力弾を撃ち込んだ。すると、目の前の光景がぐらぐらと曲がり、（その際、美智子さんは手を振つていった）気がつくと

、源さんの家の中にいた。

あれはタイムマシーンだつたんだるつか？ 戒さん……。

急に僕は悲しくなつた。 そして、

みんなはいなかつたが、源さんは一人そこにいた。源さんは、「戻ってきたか。土産はもつてきたんじゃね？」

僕と怜君は顔を見合せ、

「もちろん」

と言つた。

今がいつなのか訊くと、今さつき、みんなが魔王を倒しに出ていつたばかりで

、今、僕と怜君に奥義を使つたばかりだと言ひ。怜君は、

「じうなること、わかつていたな、源爺」

「まあ、の。ただ、あのままじや、君らが見た未来の通りになるのはわかつとつたんでな」

そして源さんは、みんなには、一人はトイレで遅れる、と言つておいたから、早く行つておやり。と、なんと爆弾発言をした。

あれから十分は、たつている。

急いで外に出ると、みんなからトイレ長いぞ～、とのブーイング。怜君はなんと

かごまかしていたが。

僕は決意を決めた。

真剣な顔で、

「みんな、訊いて欲しいことがある、魔王は、未来の僕なんだ」

最初は光秀、級長はからかっていたが、晴美や条達が下を向いていのを見て、

さとつたみたいで、急に空気が重くなつた。僕は言葉を続ける。

「地球を守るためになんてかつこいことは言わない。けど、大事な人を守るため

、未来の僕を倒すため、今の僕に力を貸して欲しい！」

晴美が、

「ハツ、何だ、もう覚悟は出来てんのか。まあ、俺がぶつちで（未来の）お前を倒すのは変わらねえがな。」

条は

「えらいよ、翔君。君なら、出来る気がする」

愛さんは

「サポートは私に任せて」

級長は僕の背中を思いつきりたたき、

「私、今の翔に味方するからね」

光秀は僕の左肩に手をおき、

「ま、未来の根性曲がりのお前を正してやるぜ」

怜君も光秀とは反対側の肩に手をおき、

「俺の力でよければ、いくらでもかしてやる。……翔、準備はいいか？」

と、それぞれの言葉を僕は受け、僕達は今、

「じゃあ、行こう。僕達の物語を終わらせるために！ そして、

必ず倒そう、

新しく紡がられる未来のために…」

出発する。

## 決意を胸に・真（後書き）

もつとやるやうなクライマックスです。

翔と魔王はどんな結末をむかえるのか、  
そして、残りの一人とは？

そしてそして、地球やみんなの運命は…

次回、最終回、涙のあとにて、ENHANCE期待！

なんぢやつて。まだ題名やラストにするかは決まってないです。  
筆者、最後にかつこつけました。  
すみません。

度々すみません。怜と翔の言葉を忘れていました。  
更新しましたのでよろしくお願ひします。

## 踏みしめていく、その先に

僕達は学校の天使界から、宇宙、魔王、未来からきた等で検索、場所を特定した。

月の近くらしい。異界の扉をくぐつたが、そこは宇宙ではなかつた。

ただただ平らな地面と空、山があるのみの世界だ。晴美が、「ハツ、こいつあ、異界の扉の転送ルートがねじ曲げられてるな」と、言い、その後、

「気をつけろ、魔石が反応している」

と、怜君の警告とともに、いきなり、何の音沙汰なしにウ○ト○マソクくらいの大

きさはあるうか、という、ゴーレム（レンガの巨人）が現れた。

「あんなのありかよ！」

光秀は驚きのあまり、腰を地面についた。

「勝てる気がしないわ」

級長も額を手でおさえている。

晴美が、

「なーに言つてんだ、お前らこな魔王を倒してもうつんだぜ。調べたが、魔王にたどり着くまでに一つの道のりになつてゐるらしい。だが、道のりは短いとみた！」

ここは俺に任せて先に行け！　後を、頼んだぜ」

そう言つと、晴美は右手をかざして異界の扉を開いた。

級長が、でもつ、こんなの人で勝てるわけないじゃない、と言い、光秀は、行こうぜ、翔、魔王を倒すんだる、と言い、怜君は、どうするんだ、翔

？

と言つた。僕は、

「行こう、晴美の死は無駄にはしない」

途中、死んでねえよ、という声が聞こえたので、後ろを振り向くと、

巨大ゴーレ

ムが右足で晴美を踏みつけようとしていた。

「晴美！」

怜君は叫んだが、間に合わず、晴美は……。かと思つたら、ゴーレムの右足が破

裂した。

重心を崩したゴーレムは右前方に倒れそうになつてゐる。つて、僕達の方に倒れるー！

早く行け、とのみんなの声に押されて、次の天使界へと入つて

行つた。その際見た、後ろの光景は、右人差し指を天につきだして  
いる殺し屋、

デスと、しりもちをついているが、グッジョブの合図をとつてゐる晴美だつた。

ゴーレムの右足は再生しかけていたが、あの一人なら、僕はなんだか安堵した。

そして、次の天使界。

山が噴火し、地面にところどころ亀裂があり、亀裂から、溶岩が流れ  
れているそん

な世界だった。

「気をつけて、魔石が反応しているわ

と、級長。その直後、突然、さつきのゴーレムと変わらない大きさ  
のドラゴン、

それもところどころにアーマーを装着しているドラゴンが現れた。

……めっちゃ

かつこいい。怜君は、

「アーマード・ドラゴン、神々に使える神獣だ。何故ここに

そのドラゴンは、大きく息を吸い込むと、小さな山ぐらいはありそ

うな火球をはいてき

た。盾で吸収しようとしたが、巨大すぎて、一度に吸収しきれない。終わりかっと

半ば諦めていた時に現れ、炎を斬つたのは、薰さんだつた。炎を僕達の逆から斬つたようで、盾を避けるように火球は飛んで行き、

後に爆発した。

「 薫さん！」

僕は声をかけた。

「 ここは私に任せらつといいたいところだが、一つ、子供た……いや、翔、お前

に聞きたいことがある」

僕が首をかしげていると、

「 お前の覚悟はっ！」

「 必ず、未来の僕を倒す！　そして、みんなで幸せな未来を掴みとるんだ！」

薰さんはフッと笑い、

「 少々、お前をみぐびつていたようだ。さあ、行け、後に勇者と謳われる者達よ

。もう、用はないっ！」

と言うと、次の光の扉を開いてくれた。

僕達は今度は迷わず先に進んだ。薰さんなら、信頼できる。そして、最後に見た

、薰さんが、ウオオオオオ、と、ドラゴンに突っ込んでいく姿は、後々まで、僕

の目に焼き付いていくことになる。

そして、異界の扉をくぐると、そこには、妖艶に光る赤い月を前にして、僕達に

背を向けている魔王がいた。

白いスースを着て、背も高い。180近くありそうだ。これが魔王。

僕はいろんな思いを馳せながら、とついつかの名を呟んだ。

「魔王！」

魔王はゆっくりと振り向くと、

「魔王だなんて、仰々しいな、お前は僕だぞ。まあいい、僕と、冷、美智子に光秀

、メンツはそろつているようだ。しかし、君達は知っているかい？

これから末

来が一通りあることを。一つは君達が僕に負けた場合の絶望の未来、

もう一つは

僕がいた未来だ。どちらにせよ、救いはない。諦めないかい？」

## 踏みしめでござ、その先に（後書き）

あ～、ラストが近い注意報です。

終わったら、どうしようかっていつも

不安感が強くてなかなか次の話が進んでおりません。

しかし、終わるとなると、本当に寂しいしだいじやうせんます。  
終わりよければ全て良しこうことわざもあるようだし、  
ラストは重要なんだと思います。

よく考えて作っていきたいと思います。

筆者、頑張ります。

ちなみに、前話、セリフを一部変えたので、もう一度、見てやってください。

## 戒さんの意識

僕は、

「諦めるもんか、お前を、倒す！」

と言った。魔王は軽く溜め息をはぐと、  
「そうかい、他のみんなは？」

光秀は魔王を指さして、

「翔は好きだけど、お前は嫌いだ！」

と言い、級長は大きな声で、

「私は、今の翔を信じる」

と言い、怜君はあざけるように、しかし、冷静に、

「フツ、未来のお前は馬鹿だな、翔。お前を倒すためにここまできたんだ」

と言った。魔王は、

「そりゃ、なら仕方ない。我が力、存分に思い知らせてやろう」

そう言うと、魔王は右手を右へ左へまるで指揮者のように振り始めた。

僕達は身構えた。怜君がまとまつてるとやられる、散れつと言つたが、その時、

魔王は、四人に分身していた。

「邪影石を手に入れた僕の力は二つある。一つは想像を実現する力。つまり、夢を現実にする力だ。もう一つは……出すまでもないな。僕、四人相手に、勝てるかな？」

四人が同時に話す。とても不気味だ。

光秀は

「一人一殺でちょうどいいな」

ツツコミたくなつたが、その通りだし、今はそれどころではないの

で、目の前の

魔王に全神経を集中した。僕の前にいる魔王は再び手を振る。すると、遠くから

凄い音がして、何か、キラッと光るのが見えた。

僕は反射的に盾を出した。すると、盾にぶつかり、爆発し、僕はそれを吸収した。

僕が瞬きをしていたぐらいの時間だったが、高速、いや、光速で何かが飛んできたのだ。

「そう、小隕石だ」

魔王がそう言った時、次々と音があちこちからしたので、このままでは全滅だ。

躊躇してる暇はない、と思い、

「リバウンド・ゼロ！」

リミットブレイクを使つてしまつた。僕の体と盾が一瞬、炎のよう

に緑色に煌め

いたと思つたら、すぐに戻つた。

魔王は

「くつ、夢を実現する力にリバウンド・ゼロ、だと…？」

力が出せない！　なる

ほど、地球への隕石もこれで、止められた訳だ。僕の野望、こんなことで止められるとは

「おかしい、わざわざ奴の体をすり抜ける

級長は

「分身だからじゃない？」

と言つていたが、魔王は、

「そうではない、元々が、意識体なのだ。肉体など、邪影石の力を手に入れた時に持つていかれた」

みんな、びっくりしたみたいで、動きが止まつた、僕もだ。

級長は、

「幽靈!? そんなの、勝ちようがないじゃない」

魔王は、だからだ、と、手を振り、左手を額にあてて、

「この時代では僕の勝ちが確定していたはずなのだ……なのに。なんてな。フツ

、クク、クックツ、ハーツハツハツハツ。隕石はすでに私の手を離れ、軌道は確定している。もう一つの力でも、お前らをほふることは十分できる

魔王達は、ハアアアアア、と力をためていて。その間に、光秀のグラビティバウンドを当てよう、と思つてもすり抜け、級長も同じ。

怜君は、試してみるか、と言い、怜君の加重カウンターももちろん、効果なかつた。

どころか、力の行き場を無くした倍にする力は怜君自身に暴発した。

「怜君!」

僕達は近寄つたが、胸に凄いあざが出来ていた。怜君は片膝をついて、

「心配するな、しくつただけだ」

しかし、心配するな、という方が無理つてものだが今は、魔王を倒すことが先決

かもしれない。僕も、時を止める力と倍にする力を合成、覚悟を決めて、時を急激に加速する力の能力刀を魔王にあてよう、と思つたが、すり抜けてしまつた。

どうすれば……。

魔王は

「永遠に夢を見させる奥義、これで、終わりだ!」

「」はひ「だらう。広い草原に、風が吹いている。

なんだか気持ちがいいや。僕はそこで寝ることにした。しかし、田をつぶつてか

らすぐに声がした。

「君は、それでいいの？」未来を、幸せな未来をつくるんじゃなかつたのかい？

「はつと田が覚めた。戒さん、確かに戒さんの声だつた。隣を見ると、びひひひ、みんな同時に田が覚めたよつだ。

## 戒むんの意識（後書き）

ああ、わが子が離れていくような感覚を覚えます。  
次でラストです。

## 魔王の末路へ 未来へむけて

魔王は、

「馬鹿なつ。僕の秘技から逃れる術などハツ、もしや、先程のリバウンド・ゼロの余韻が……しかし、封じることは出来なかつたようだな。今一度使えば済む話

魔王達は再び、ハアアアアア、と力をため始めた。

怜君は、

「さつきの夢で、思い出した、奴の能力はなんだと思つ?」  
「どういふことだ、怜」

光秀は訊いた。

「つまりだ、翔、奴を倒せるのはお前しかいない! 何故なら、奴の分身能力は増殖、つまり木属性、勝てるのは水属性しかない。つーか、勝てると

したら、ここ

しかないと

みんな頷いた。しかし、ん? 待てよ。

「でも怜君、僕は火属性の技と土属性のリミットブレイクしか持つてないよ。リ

ミットブレイクは使つてしまつたし」

怜君は人差し指をたてて、いいか、と話しあじめ、

「戒からもらつたものがあつたろ?」

「でもあれは劣化して……」

怜君はだからだ、と言い、……何が言いたいんだろう?

「戒の意識をここに呼び寄せる、天使界は意思の力が強く作用される、と源爺に

ならつたな?」

あつ。

「四人で強く念じれば、戒の力を使えるかもしれない。いいか？」  
魔王はまだ力をためている。

「わかつたわ」

「任せとけ」

「うん、わかつた」

僕達は固まつて、手を合わせた。（僕は左手を）

戒さん、今一度、僕達に力を！

「くらえ、アクアスプレッド！」

指先から出たそれは、紛れもなく、完璧なアクアスプレッドだった。

弾丸の如き

の速さで魔王にあたつたそれは、爆発、魔王全員を包みこみ、魔王は消滅していく。

「おのれえええ、翔！しかし、地球は滅びる、今からそれを想像するのが、樂し  
みだ。そして、未来にお前も倒される運命だ。覚えていろッ！」  
と、言つて消えていった。級長が見届けた後、  
「あはなりたくないわね」  
と言つた。

僕は恥ずかくて下を向いて、そうだね、と言つた。

その後、薰さんや、殺し屋、晴美が来て、敵は倒していくが、隕石をかたずける

のに手こづった、すまない、といつて来た。つまり、終わったのだ。  
その後、いくら戒さんの技を使っても、アクアスプレッドは出なかつた。

そして、源さんに報告したり、三浦さんに報告したり、じいちゃんに報告したり  
、帰つてからが忙しかつた。

病院に行き、静とずっと話をしたりもした。光秀は夏休みの宿題を遅れて提出したもので、今までの冒険を書いただけなのに、素晴らしい出来だと先生に言われ、金賞をとつていた。なんか、ずるい。

ちなみに、戒さんの遺品であるタイムマシーンは僕の机の中に眠っている。

来年、四人ともみんな同じ中学に入り、夏休みになつた。今、その四人は源やん家に集まつている。

「じゃあ、約束どおり、神聖石は先に見つけた方のものだな？」

怜君は確認している。美智子は、

「ルールがあります。悪用はしないこと」

「あつたりき」

と、光秀。

「うん、いいよ

と、僕。

「では、よーい、スタート！」

級長が手をたたいて、みんなが走り出した。どうに向かうのかはわからない。しかし、誰かが見つけるのだ。僕は、もちろん、僕の未来を、運命を

変えるため。

「見つけた、神聖石」

触ると全身が濃い緑色に光つた。

「僕の願いは、リミットブレイクを一時的にかなり強化して欲しいつてこと」

これでよし。  
「リバウンド・ゼロ」

## 魔王の末路へ未来へむけて（後書き）

終わりました。とうとう、終わりました。  
かなり、寂しいものや悲しいものもあるものの、  
完結できた、という達成感もあります。

ラストは筆者にとってはいい出来だつたと想つ  
ですが、どうだったでしょうか？

次なる作品に向けて努力したいと思います。  
今まで、じっくり読、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2128h/>

---

いしの力

2010年12月12日16時05分発行